

# サラリーマンだから貧乏ですが、なにか？

## ～20代からのやさしい経済学～

本作品は、現在 PHP 研究所から出版されている既刊書であり  
( <http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/4569776620/fushicho-22/> )  
著作権は大村あつしに帰属します。

よって、下記は一切の行為を禁じさせていただきます。

回覧、配布、改変、二次利用

本書が以下のような人々を創出しても、一切の責任を負いかねます。

- 本書を読んで、サラリーマンを辞めなくなった人（もしくは辞めてしまった人）
- 本書を読んで、サラリーマンになるのが嫌になった学生
- 本書を読んだ従業員が大量に退職してしまったと嘆く社長
- 本書を読んで、社会主義国家に移住したくなった人（もしくは移住してしまった人）

本書は、高名な経済学者の理論を基にしたフィクションです。

序文に変えて ～本書の読み方～

経済学 — それは、あなたの人生を豊かにしてくれるたわわに実った果実です。

本書は、サブタイトルにあるとおり、「世界一温かくてやさしい経済学」の本です。ですから、「経済なんか勉強したことがない」という方でも必ず理解できるよう、一人の落後者も輩出しないことを念頭に書かれています。

しかし、そうはいつでも、多少骨のある解説が出てくることもまた事実です。特に、「エピソード5」などは全体の中でもっとも難解なパートですが、この場を借りて、本書を楽しみながらより確実に内容を理解するテクニックをご紹介させていただきます。

それは — 「難しいと感じたら、構わずに次のエピソードに進む」です。なぜなら、本書は全部で十一のエピソードから構成されていますが、すべてのエピソードが、「その前のエピソードが理解できなかった人でも理解できるように」書かれているからです。すなわち、たとえエピソード5を「難しい」と読み飛ばしてしまっても、エピソード6を読み終えたときには、無自覚のうちにエピソード5も理解できてしまっているのです。

私は、学問はすべて順序だって理解される必要はないと考えます。早生まれというハンデのためか（ただの言い訳？）、私の小学校の算数の成績は散々でしたが、中学校で「方程式」を理解して初めて、小学校の「つるかめ算」が理解できました。この経験から私が学んだことは、学問で大切なのは「順序」ではなく「ゴール」であるということです。

ですから、少しでも「難しい」と感じたら、遠慮なく読み飛ばしてしまってください。それでも、本書、『サラリーマンだから貧乏ですが、なにか？』、略称『サラびん』は、読者のみなさまを一人残らずゴールまで責任を持ってご案内いたします。

経済学 — それは、あなたの人生を豊かにしてくれるたわわに実った果実です。これからあなたは、その美味なる果実を収穫する小旅行に旅立つのです。『サラびん』というガイドを携えて。

## 目次

プロローグ	六本木ヒルズ、大展望台にて I
エピソード 1	夜景が教えてくれるサラリーマンの異常な実態
エピソード 2	なぜ、サラリーマンは貧乏なのか？
エピソード 3	なぜ、彼はパンと帽子の交換を拒否したのか？
エピソード 4	本当に、商品の価値は労働時間だけで決まるのか？
エピソード 5	学校が教えてくれたあの需給曲線は嘘だったのか？
エピソード 6	なぜ、お尻も拭けない一万円札がトイレットペーパーよりもありがたいのか？
エピソード 7	サラリーマンは現代の奴隷か？
エピソード 8	サラリーマンは資本家から見たら商品なのか？
エピソード 9	なぜ、資本家は金持ちなのか？
エピソード 10	本当にサラリーマンは不幸なのか？ I
エピソード 11	本当にサラリーマンは不幸なのか？ II
エピローグ	六本木ヒルズ、大展望台にて II

## プロローグ 六本木ヒルズ、大展望台にて I

弾力に富んだ温かな感触を唇に感じ、僕は焦燥感に駆られながらも瞳を閉じることにした。

どうした、エリナ？ こんなところで、お前らしくもない。みんな見てるじゃないか。

そう。「こんなところ」。そのとき、僕とエリナは、「成功者のシンボル」といわれる六本木ヒルズの大展望台、「東京シティービュー」にいた。

それにしても、中空を舞うような六本木ヒルズの展望台で、衆人環視の中、なぜ、僕はエリナとキスをしているのだ。って、それは僕にもわからない。突然、唇を重ねてきたエリナに聞いてほしい。

そもそも、エリナが六本木ヒルズの大展望台に来たがったのも謎だ。一ヵ月前、僕の誕生日に二人で来たばかりだ。もっとも、そのときは、こんな巨大なビルにオフィスを構えられる社長がいる理由も、一方で、都内には住めないために片道一時間半もかけて通っているサラリーマンがいる理由も、僕にはわからなかった。

しかし、今ならそのカラクリ、いや、僕たちが暮らすこの社会の仕組みが手に取るようにわかる。わからないのは、むしろ、エリナのこの大胆な行動だ。

眼下に広がるきらびやかな夜景に、乙女心がロマンで満たされてしまったためだろうか……。

でも、一ヵ月前も僕たちはこの絶景を見ていたではないか……。

## エピソード1 夜景が教えてくれるサラリーマンの異常な実態

「ちょっと。やめてよ、多喜二（たきじ）。恥ずかしいじゃない、こんな大勢の前で！」

眼下に広がるきらびやかな夜景に圧倒された僕は、思わずエリナの肩を抱き寄せ、手の甲をつねられる羽目になった。

「いて！」

「いて、じゃない！ それにしても綺麗な夜景ねー」

「ああ」

その日は、僕の二十四回目の誕生日であった。大学一年のときから付き合いはじめたエリナは、六本木ヒルズのイタリアンレストランで、心のこもったプレゼントを照れくさそうに差し出してくれた。

「多喜二。開けるのは家に帰ってからにしてね」

「やだね。今、ここで開けるよ」

僕は意地悪な笑みを作ると、ラッピングをほどき、プレゼントを箱から取り出した。庶民的なブランドの名刺入れだった。僕は、それを見つめながら心の中で呟いた。

エリナ、なにも恥じる必要なんかないよ。背伸びしたプレゼントなんていらぬ。安月給のお前が心を込めて選んでくれた。それだけで十分だ。僕はむしろ、この「質素さ」が嬉しいよ。アルマーニのスーツなんてくそくらえだ。

そして、ディナーを済ませた僕たちは、そのまま六本木ヒルズの五十二階の大展望台、東京シティービューに足を運んだ。

僕の手の甲をつねったそばから、エリナが思わず「綺麗な夜景ねー」と吐息を漏らすのもよくわかる。本当に、「綺麗」としか表現しようがない。こんなときばかりは、自分のボキャ貧が嫌になる。

あ、強いて言えば、「光が織り成す宝石箱やー」って、これじゃあ、どこかのグルメレポーターじゃないか……。

とにもかくにも、足もとに広がる光の海は絶景であった。

そのとき、僕は何気なく空を見上げた。そこには、あるべきものがなかった。そう。星が一つも瞬いていない。静岡県出身の僕が、我ながら最高の比喩を思い付いたのはその瞬間だ。僕は、東京育ちのエリナに向かって言葉を発した。

「なあ、エリナ。東京と静岡の一番の違いってわかる？」

「え？ ああ。星が上にあるか、下にあるか、でしょう」

な、なんで僕の人生最高の比喩をそんなにいとも簡単に……。せつかく、「これからは俺のことを『石川啄木』って呼べよ」って詩人を気取ろうと思ったのに……。

「ちっ。ポエマーになり損ねたよ」

『『詩人』は『ポエット』。ポエマー、って何語よ』

「ポ、ポエムの比較級じゃないか。ポエム、ポエマー、ポエメスト、って習わなかったか？」

「へえ、名詞の比較級を教えるなんて、すごい進んだ学校ね。それより、本当にこの夜景を見てると、星の上に立った気分。世界を征服した気分になるね」

「ああ」

僕は同意してエリナの横顔を見た。そして、目を疑った。エリナが、夜景を見ている女性とは思えない険しい顔をしていたからだ。

「ねえ、多喜二。この夜景の正体、わかる？」

「え？ そりゃあ、光だろう？ 部屋から漏れてる」

僕は、唐突な質問ながら当たり前の正解を口にした……。つもりだったが、エリナが続けた。

「ねえ、見てよ。この膨大な数のビルやマンション」

「確かに、すごい数だね。無数、と言ってもいいくらいだ」

「それに加えて、こんな上空からは視認できない低層の建物もあるんだよ。そして、そうした建物は、当たり前だけど地面の上に建っている……」

地面か……。東京の地価って高いんだろうな。いや、高いに決まってる。一九九〇年前後のバブルの時代には、新宿区の土地を買い占める金があればアメリカ全土が買えるとまで言われたんだ。日本全土を買い占める金があれば、日本の二十五倍の面積を持つアメリカを二つ買えるといわれたんだ。その土地の値段が、たとえバブルが弾けても安かろうはずがない。

「多喜二。アタシが言いたいのは、この眼下に広がる無数の建物にはオーナーがいるってこと。さらには、その建物に場を提供している土地のオーナーもいるわ」

この一言は、僕にはかなり衝撃だった。そんなこと、今まで考えてもみなかった。しかし、動揺している僕に構わずにエリナはさらに口を開く。

「その一方で、無数のマンションには無数の部屋があり、その部屋の数だけ、それを借り



ながら生活している人がいるんだよ。つまり、さっきのアタシのクイズの答え。この夜景の正体。一部屋一部屋から漏れているのは、庶民が日々流している汗や涙を成分にした光よ」

僕の背中に電流が走った。突如として夜景が歪んだ。優雅で美しい白鳥も、水面下ではぶざまに、必死に足をかいているという。僕は、白鳥の足を見てしまった気分になった。

うん？ ちょっと待てよ。この東京シティビューの視界内に住んでいる人はまだ恵まれているんじゃないか。都心の高い家賃が払えずに、遠方から毎日都心に通う人々が、眼下で光を供給している無数の人々と同じくらいいるんだ。俗に、埼玉都民、千葉都民、神奈川県都民と呼ばれる人々だ。実際、関東地方の人口は、「地方」単位では世界一としてギネスブックに認定されているくらいだ。

いずれにせよ、都心でこうして部屋を借りている人にとっては、「夢のマイホーム」など文字どおり「人生最大の夢」。それに比べて地方はいい。多くの人々がマイホームに住んでいる。

……。おいおい。僕はなにを勘違いしているんだ。地方の人々も、ローンを払いながらのマイホームだ。厳密には所有物ではなく借り物だ。「マイホーム」ではなく「ユアホーム」だ。地方も、眼下の住人と条件は同じじゃないか。

「夢のマイホーム」

そのとき、エリナがそう口にしたので、僕は思わず頭の中を読まれたのかと訝（いぶか）った。

「誰が作ったキャッチコピーか知らないけど、ホント、嫌な言葉。この言葉を聞くたびに気分が暗くなるのはアタシだけ？」

「え？ いや、実は、俺も同じことを考えていたよ。だってそうだろう。少なくとも俺たちは、人間が人間としての生活を営むための必要最低限の三要素は『衣』『食』『住』だって教わったよな」

「へえー。さすが、ポエム、ポエマー、ポエメスト、を教える進学校ね。『衣食住』もきちんと教えてくれたんだ。フフフ」

僕は、苦笑しながら黙考に入った。

「衣」に関しては、所有点数や値段にこそ差があれ、確かにそれを持っていない人はいない。というか、なにもまとわずに外を歩いたら公然わいせつ罪である。すなわち、法律も、

「衣」は持っている当然、という前提で施行されている。

「食」も同様だ。厚生労働省が発表する主な死因のどこを探しても「餓死」なんて見たことがない。そのために、「飽食(ほうしょく)ニッポン」なんて言葉が一時期大流行もした。

しかし、同様に重要かつ最低限保障されなければならない「住」にいたっては、「持っている当たり前」なのではなく、「夢のマイホーム」なのだ。これがおかしくなくて、なにがおかしいと言うのか。

「ねえ、多喜二。アタシたちはみんな、一生懸命、働いてるよね？」

「ああ」

「朝から晩まで歯を食いしばり、残業も休日出勤もいとわずに身を粉にしてるよね」

「まったくだ」

「それなのに、多喜二の誕生日にアルマーニのスーツ、一つ買ってあげられない。さらには、それがなければ人間的な生活とは言えないはずの『住』が『夢』だなんて……」

僕は二の句が継げなかった。誕生日を祝ってもらい、その延長線上でデートを楽しもうと訪れた展望台で、夜景を見ながらこんな会話をするようになるなんて。この厳しい現実を今まで「異常」だと思わずに生きてきたことに気付かされるなんて。そして、こんな暗澹(あんたん)たる気持ちになるなんて。

「多喜二。せっかくの誕生日にごめんね。ちょっとへこんじゃったよね？ でも、今日ここに足を運んだ理由は、デートだけじゃないの」

「わかってるよ。二十四歳にしていい勉強になったよ」

「勉強になった？ なに言ってんの。まだ、アタシたち、なんにもわかつちやいないよ」

その後のエリナは説明はこうだった。マンションを貸す側と借りる側。乱暴に定義すれば、前者のことを総じて「資本家」と呼ぶ。そして、後者は「サラリーマン」と呼ばれる。

しかし、この格差はなぜ生じているのか？

なぜ、サラリーマンは、働いても働いてもマイホームは「夢」なのか？

なぜ、サラリーマンは「貸す側」にはなれないのか？

「確かに、それは興味があるな」

「でしょう？ だから、一緒に勉強しよう、多喜二。実は、アタシの同級生が、今、大学で経済学の講師をしてるの。彼に教えてもらおうよ」

「でも、俺たちに経済学なんて理解できるかな……」

「できるかな、じゃないよ。それを理解しなきゃ、一生、『夢のマイホーム』よ。大丈夫。

彼、中学生でもわかるように説明するって言ってくれたから」

エリナの最後の一言は心強かった。

「よっしゃー。じゃあ、一丁、勉強しようぜ！ 中学生で理解できるなら、余裕、余裕。

ハハハ」

すると、エリナは唇の端を持ち上げた。

「中学生なら余裕だけど、ポエマーでも理解できるとは、彼、言ってなかったけど……。

フフフ」

## エピソード2 なぜ、サラリーマンは貧乏なのか？

—— はたらけど はたらけど猶（なお）わが生活（くらし）楽にならざり ぢつと手を見る ——

使用されていない大学の小教室。そこの最前列に腰掛けた僕とエリナに自己紹介でもするのかと思ったら、彼は黒板によく知られた石川啄木の短い歌を書いた。そして、チョークをマイクのように握りしめ、こぶしを回して演歌でも歌い出しそうな雰囲気を醸しながら言った。

「これからきみたちが学ぶのは、この歌が詠まれた背景！ すなわち！ 資本主義のメカニズム！」

完全に自己陶醉して、あっちの世界に行ってしまった。なんだ、この変人は……。本当にエリナの友達なのか？ ボサボサの頭に黒縁の眼鏡。それに、なぜ経済学の講師のが白衣を着ているんだ？ そのくせ、ちょっと色男だったりする。

あっけにとられながら横を見ると、エリナは微笑を浮かべている。しかたない。自分で言うしかないのか。

「あの……、その前に自己紹介をお願いしますか」

「あー、すまないね。私は……」

そう言って、彼は黒板に「マルくん」と書いた。僕は肘（ひじ）を滑らせた。

「ちょっと。いい年して、初対面であだ名はないんじゃないですか。あなたも二十四歳ですよね。それに、なぜ、『君』の『く』がカタカナなんですか」

「まあまあ。わかる人にはわかるから。とにかく、『マルくん』と気兼ねなく呼んでくれたまえ、ポエマーくん」

「誰がポエマーですか！」

まったく、エリナも余計なことを吹き込みやがって。しかし、こいつが先生で大丈夫か？

「大丈夫！」

マルくんが心の声に答えたので、僕は思わず背筋が伸びた。

「中学生でも理解できるように教えるから。いや、厳密には、はなっから中学生でも理解できる程度のことなんだよね。だからこそ、学校では教えないとも言えるね。って、それはともかく、この石川啄木の歌は見事の一言に尽きるねー。芸術！ これぞポエム！」

すると、エリナが苦笑しながら頭を振った。

「ちょっと、マルクン。あなたの言いたいこと、なんとなくアタシ、わかっちゃってるけど、多分、あなた、勘違いしてるわよ」

「勘違い？ この私が？ このマルクンが？」

「このマルクンが？」は余計だろ。

「うん。啄木が働いても働いても裕福になれなかったのは、資本主義の責任じゃないわよ。色に狂った彼が稼いだそばから遊郭（ゆうかく）で散在していたからなの。まあ、啄木の清貧なイメージを損ねちゃって悪いけど、啄木は自分の女好きに嫌気がさして、ついそんな歌を詠んじやったってわけ。これがその名歌の誕生秘話よ」

「ふむ。さすがはエリナさん。物知りだな。このマルクンも勉強になった。では、今日はここまで」

「おい！ 今日はここまで、って、まだ、啄木が売春婦に興じていたってことしか教わってないぞ！ って、それを教えてくれたのはエリナだろう」

しらない間に、僕もタメ口になっていた。

だが、歌の誕生秘話はともかく、現代のサラリーマンはどうなんだろう。残業しても休日出勤しても、その稼ぎの大半は生活費として消えていく。まさしく、啄木の歌そのものの生活だ。彼が自戒の意味を込めて詠んだ歌が、資本主義の実態をたったの三十一音で端的に表現するものとして、彼の死から百年が過ぎようとしている今なお、経済学の世界で引用されるのも無理はない。

ところが、すし詰め満員電車で息も絶え絶えに通勤するサラリーマンを横目に、ドアの開け閉めまでしてくれる運転手を従えて黒塗りの高級車の後部座席で優雅に出勤することが許された富裕層がいるのも歴然たる事実だ。そして、僕たちは彼らを「資本家」と呼ぶ。

彼らは、働いた以上の金を稼ぎ、夜は赤いフェラーリに乗り換えて、孫子の代までも使い切れない金で究極の贅沢を味わっている。しかし、一方で、どれほど働いても贅沢に手が届かないのが一般的なサラリーマンの姿だ。これは、今この瞬間も僕たちの目の前で確実に発生している現象だ。

僕は、そこまで黙考すると、その内容をかいつまんでマルクンに話した。

「おお！ いいところに気が付いたね、多喜二」

今度は呼び捨てかよ。

「大切なことは、いかなる高名な学者であろうと、現実を否定することはできないってことです。学問が現実を打ち負かすことはできないのです。たとえ、このマルクンであろうとも」

だから、「このマルクン」は余計だろ。それに、突然、丁寧語になってるし。まあ、このほうが会話も噛み合うか。

「では、なぜサラリーマンの生活は潤わないのでしょうか？」とマルクン。

「その理由はシンプルですよ。僕たちは資本主義経済に生きてるんですから」

僕が即答すると、マルクンはさらに踏み込んできた。

「では、資本主義経済では、なぜサラリーマンは低所得にあえがなければならないのでしょうか？」

当然にして僕は返答できなかった。見ると、エリナも答えに詰まっている。その様子を見て、マルクンが自答した。

「二人が答えられないのは当然です。なぜなら、教科書には載っていないからです。そもそも、義務教育では資本主義の仕組みは教えてくれないのです。そのメカニズムは、宇宙旅行だナノテクだという現代になっても、『資本主義を教えたくない人たち』によって隠ぺいされ続けています」

すると、エリナが口を開いた。

「なぜ？ 中学生には難しいから？」

「違います。最初に言ったとおり、中学生でも理解できます。むしろ、頭の柔らかい中学生のほうが理解がはやく、そして深いかもしれません」

「じゃあ、なぜ？」と再びエリナ。

「それは……。そこまで徹底しなければならないほど、資本主義というのはサラリーマンにとって不公平な経済世界だからです」

なるほど。要は、その隠ぺいされている資本主義の驚愕のメカニズムを、これからマルクンが白日の下にさらしてくれるってことか。確かに、明治四十五年に死去した「歌人」の啄木はともかく、二十一世紀に生きる「経済人」たる僕たちが、資本主義のことをなにも知らなくていいはずがない。

すると、マルクンが力を込めた。

「間違っても、経済学って難しそうだし退屈そう、なんて思わないでください。正直に言えば、確かに経済学は簡単な学問ではありません。それも当然で、経済は生き物ですから、『株で絶対に儲かる方法』なんて理論が確立されていないように、今なお経済学は経済の仕組みを解明し切れてはいません。ノーベル経済学賞を受賞した理論ですら賛否両論がある。それが経済学です」

そこで言葉を切って深呼吸をすると、マルクンはさらに声のトーンを上げた。

「しかし、『株を安く買って高く売れば儲かる』という真理を否定することは誰にもできません。同様に、『労働者を働かせれば資本家が儲かる』という真理も誰にも否定できないのです。

これから私は二人に、この真理、この現象を発生させているメカニズムに着目しながら、中学生でも理解できるように平易に解説をしていきます。経済学は難しくても、私の講義は決して難しくありません」

ふーむ。考えてみれば、大袈裟な言い方だけど、国を挙げて隠ぺいされている資本主義のメカニズムを知ることが退屈なはずはないよな。むしろ、ワクワクするな。

「私がこのメカニズムを勉強していた頃は、興奮のあまり寝付けずに、また、寝ても夢にまで出てくるありさまでした。だから、決して大袈裟ではなく、二人も私の講義を、眠れなくなるかもしれない、くらいの覚悟で聞いてください」

僕の喉仏が鳴った。そして、それが聞こえたのか、はたまた興奮のためか、エリナも思わず眉根を寄せて、真剣な表情のマルクんに言葉をぶつけた。

「ねえ。本当に、資本主義というのはサラリーマンにとって不公平な経済世界なの？」

「と言うと？」

「アタシ、思うんだけど、資本主義は確かにそのメカニズムを知らないサラリーマンにとっては悲劇よね。でも、メカニズムさえ理解してしまえば、誰もが勝てる権利を有している。すなわち、公平な世界なんじゃないの？」

「さすがはエリナさん。そのとおり。不公平なのは資本主義そのものではありません。それを平等に学ぶ権利が奪われていることに問題があるんです。そして、そのメカニズムを知る者と知らない者との間に生まれた知識格差。これがお金に姿を変えて、『貧富の差』とって顕在化している。それが資本主義の世界ってわけです」

なるほど。

はたらけど はたらけど猶わが生活楽にならざり ぢつと手を見る

要するに、この歌のような世界を変えることはできないわけか。いや、資本主義自体は公平な世界なんだから、むしろ変わっちゃいけないのかな？

そうだよ。実際に、社会主義・共産主義国家はどうなった。ソビエト連邦はどうなった。破綻したじゃないか。それに、日本国内に目を向けても、国営企業が民営化されて黒字に転換した例もあるじゃないか。

「もし、二人が本格的に経済学を学ぼうと思ったら、それこそ、自分の一生をそれだけに捧げなければなりません。このマルクンのようにね」

マルクンが笑顔で続ける。

「でもね、経済学を算数に置き換えるならば、二人は『分数の計算』すら教わっていないのが現状です。私は二人に、知らなくても日常生活に支障のない『微分積分』を解説するつもりはありません。知らなければ困りますし、知っていればなにかと便利な『分数の計算』を覚えてもらいたいです」

言うと、マルクンは僕たちにウインクを投げた。

「では、今日はここまでにしましょう」



### エピソード3 なぜ、彼はパンと帽子の交換を拒否したのか？

さて、こうしてマルクンの言うところの「分数の計算」を学ぶことになった僕とエリナだが、二回目の講義で、完膚なきまでに僕のやる気をそぐかのようにマルクンが発したフレーズを、僕は永遠に忘れることはないだろう。

「さて、エリナさん、多喜二くん。胸やけがするかもしれませんが、五秒間だけ我慢して、このフレーズを見てください」

そう言って、マルクンはその「胸やけのする」フレーズを黒板に書いた。

—— 交換とは、異なる使用目的を持つ、同じ価値の商品同士でのみ成立する経済行為である ——

「エリナ。俺、帰るわ」

「ちょっと、なに言い出すの！」

「だって、あのフレーズ、さっぱりだし、俺には永遠にわかりそうにないし……。それに、資本主義の仕組みなんて知らなくても、別に俺、困らないし」

だが、エリナは、教室を出ようとする僕の腕を掴んで言った。

「多喜二。マルクンの狙いがわからないの？」

「狙い？」

「マルクンは、別にアタシたちを奈落の底に沈めたいわけじゃないの。確かに、最初にこんな『言語明瞭、意味不明瞭なインテリジェンスなフレーズ』を持ち出されたら、そりゃあ不安になるわ。でも、逆にそのほうが、その意味が理解できたときの喜びもひとしおなんじゃない？」

すると、マルクンが合の手を打った。

「まさしく、それが私の狙いです。二人にはこれから、このフレーズが理解できたときに感じる感動を味わってもらいます。もちろん、心配は無用です。

乗れなかった自転車に乗れるようになったときには、もはや『乗れないことができなくなる』。ですよ？

同様に、私の説明を少しだけ聞けば、このフレーズも『理解できないことができなくなる』こと請け合いです。

あとで、この17ページに戻ったときに、『どうしてあのときは、こんな当たり前のフレ

ーズがわからなかったのだろう』と、未来の二人は、現在の自分を不思議に感じることでしょう」

僕は、「17 ページ？」と突っ込みそうになったが、なぜかその一言が「特定の人たち」にはとても重要なことのように思えて、やめておいた。って言うか、さっきから、僕とエリナ以外にも、マルクんの講義を一緒に聞いている人がいるように思えてならないのはなぜだろう……。

僕がそんなことを考えていたら、マルクんがたとえ話を持ち出した。どうやら、そのたとえ話で、先ほどのフレーズが理解できるようになるらしい。

-----

ここに、外国語をマスターしようとしている二人の女性がいます。英語をマスターしようとしている「あゆみ」さんと、フランス語をマスターしようとしている「來未」さん。

二人は、三年間、一日も休まずに勉強に勤しみ、結果として二人ともネイティブ並みの語学力を習得することができた。

では、ここで考えてみたい。

「あゆみさんは三年間も勉強したのに、なぜフランス語が話せないのか？」

こんなことをいうと叱られそうである。

「あゆみさんが勉強したのは英語でしょう。だからフランス語が話せなくても当然じゃないですか！」と。

図 3-1



ごもつともである。「三年間、勉強した」というのは勉強の「量」である。しかし、勉強の「目的」は「英語」であった。だから、あゆみさんは英語は話せてもフランス語は話せない。

しかし、この「ごもつともなこと」が、「勉強」だけではなく「労働」にも当てはまる、と言うと、「え？ それはどういうこと？」と、ちょっと焦りはじめるのではないか。

今度は、二人のアメリカ人にご登場願おう。一人は、パンを焼くのが仕事の「マイケル」という男性。もう一人は、帽子を編むのが仕事の「マドンナ」という女性。

ある日、マイケルは焼き上げたパンを片手に公園に向かった。時を同じくして、マドン

ナも編み上げた純白の帽子を片手に公園に向かう。バツタリ出くわした二人はベンチで会話を交わす。

「やあ、マドンナ。君の編んだ帽子、素敵だね。きめの細かさなんて、まるできみの白い肌のようにじゃないか」

「まあ、マイケルったら。でも、あなたの焼いたパンも美味しそうね。サーファーのあなたらしく、こんがり焼けているわ」

マイケルに悟られないように、こっそりと自分の二の腕を見て、その白い肌にご満悦のマドンナ。もっとも、マイケルが気付くはずはない。彼もそのとき、マドンナに悟られないように、こっそりと自分の二の腕を見て、その小麦色に自己陶醉していたのだから。

ひとしきり満足すると、マイケルが尋ねた。

「その帽子、編むのにどれくらいかかったの？」

「丸一日よ」

「それは偶然だ。僕も丸一日かけてこのパンを焼いたんだ。そうだ、マドンナ。だったら、きみの帽子と僕のパンを交換しないかい？」

「それはいい提案ね！」

こうして、二人はパンと帽子を交換した。マドンナが、美味しそうにパンを頬張りながら笑みを浮かべる。

「その帽子、まるであなたのためにこの世に存在しているかのようだよ。すごくお似合いよ、マイケル！」

図 3-2



数日後、マイケルはまたパンを焼いた。今度は、三日もかけた最高の自信作だ。マドンナもまた、いつものように一日で帽子を編んだ。ただし、前回とは色違い。まばゆいばかりの真っ赤な帽子だ。

再び、二人は公園で出会う。

「マイケル。そのパン、美味しそうね。先日のパンよりも美味しそうだわ」

「それはそうさ、マドンナ。だって、前のパンよりも三倍も手間ひまかけているんだぜ。それよりも、きみのその帽子も相変わらず素敵じゃないか。今度は何日かけて作ったんだい？」

「いつもどおり一日よ。それよりも、マイケル。あなたのパンと私の帽子、交換してくれないかしら？」

そう言って、マドンナはマイケルに微笑みかけた。

「交換？ ……。マドンナ、確かにきみは魅力的な女性だ。思わずその青い瞳に吸い込まれそうになる。だけど、それとこれとは話は別さ。その取引には応じられないよ」

予期せぬセリフを聞いて、マドンナは怪訝な表情を見せた。

「どうして？ ひょっとして赤はお嫌いかしら？」

「い、いや。色の問題じゃないんだ。きみのその提案には問題がある……」

マイケルが口ごもる。その様子を見てマドンナは切れた。

「まあ！ 女の私に恥をかかせて！ 許せない。もう結構よ。さようなら。あなたの今後の活躍を願っているわ！」

マドンナは、色白の顔を編み上げたばかりの帽子のように真っ赤に上気させて、ベンチから足早に立ち去った。その後姿を見送りながら、マイケルが肩をすぼめて呟く。

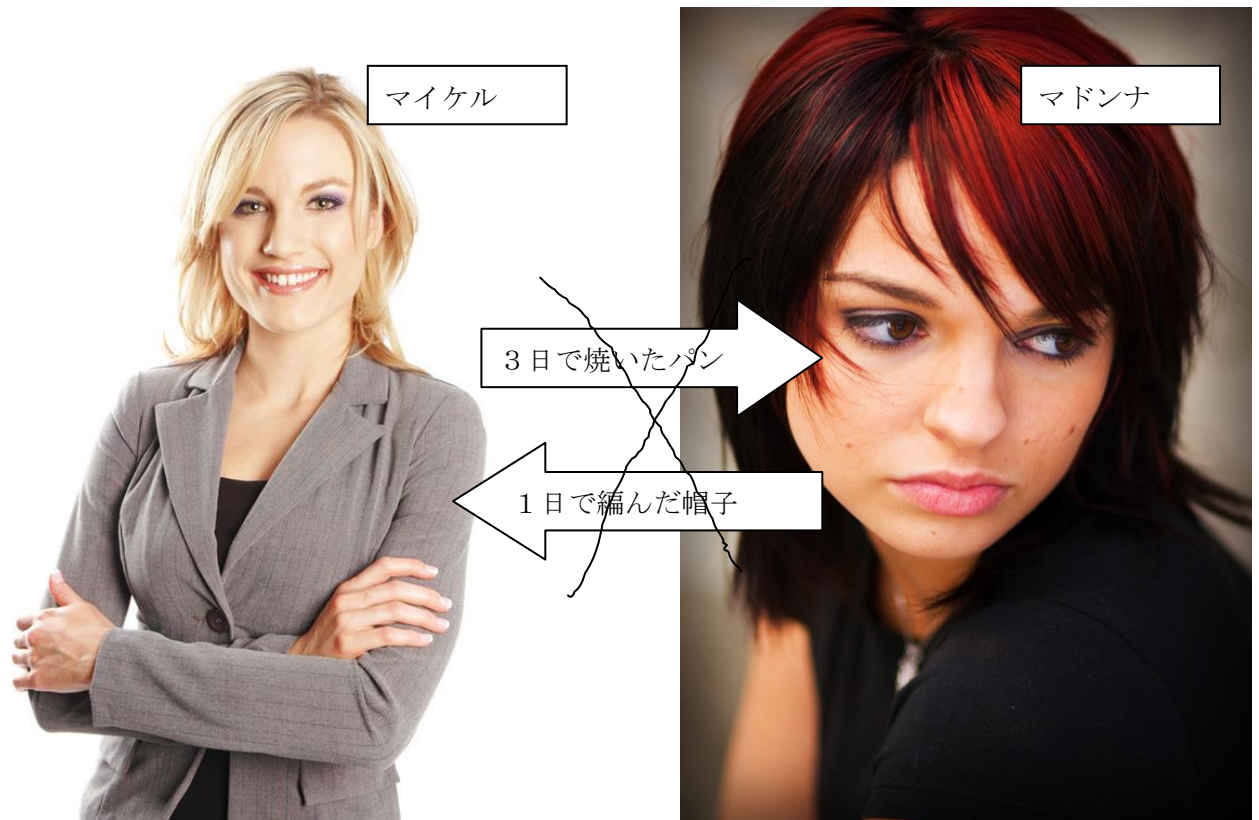
「オー、マイ、ガッ！」

マドンナが怒る気持ちもわからないでもない。しかし、一回目のときは問題なくパンと帽子が交換できたのに、なぜ、二回目にはマイケルは交換に応じなかったのか。それは、マイケルが、マドンナの申し出は不公平だと感じたからである。

マイケルがパンを焼くのに要したのは三日。一方、マドンナが帽子を編むのに要したのは一日。マイケルが、次のように考えるのは無理もない。

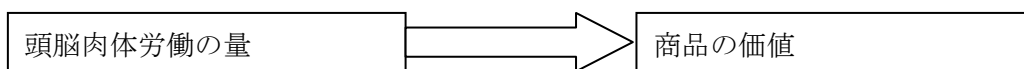
「単純に交換したら、自分のほうが二日分損をする。これでは、自分の二日分の労働がパーになる」

図 3-3



ここで注目してほしいのは、労働にはこのように「量」という側面があることだ。パンを焼くにせよ帽子を編むにせよ、頭脳を使ったり、肉体を動かしたりという点では同じである。こうした労働を、今後は「頭脳肉体労働」と呼ぶことにする。

そして、この頭脳肉体労働をどれくらいしたか。すなわち、頭脳肉体労働の「量」は、商品になったときに、商品の「価値」として浮き彫りになるのだ。



話を戻すと、マイケルのパンという商品は「三日分の頭脳肉体労働」という価値があったのに対し、マドンナの帽子という商品は「一日分の頭脳肉体労働」の価値しかなかった。両者の価値は三倍も異なっている。だからこそ、二回目のパンと帽子の交換は成立しなかったわけである（図 3-3）。

三日分の頭脳肉体労働 ≠ 一日分の頭脳肉体労働

繰り返すと、「商品」には必ず「価値」があり、その価値は、生産するために投下された「頭脳肉体労働」の「量」によって決まるのである。

もし、「頭脳肉体労働の量」がしっかりしなければ、「労働時間」に置き換えてもらって構わない。すなわち、「三日の労働時間でできた商品」と「一日の労働時間でできた商品」の価値は三倍異なる、ということである。

三日の労働時間でできた商品 > 一日の労働時間でできた商品

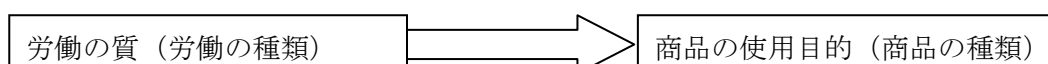
さて、もう一つ、注目してほしいことがある。一回目の交換に話を戻そう。あのときは、マイケルもマドンナも、お互いに不満も不公平も感じることなく、パンと帽子の交換が成立していた。なぜなら、二人とも、自分の商品を生産するのに費やした労働時間は「一日」であり、二つの商品の価値が同じだったからである（図 3-2）。

しかし、それだけでは交換は成立しない。もし、マイケルが、パンではなく帽子を編んでいたとしよう。この場合、帽子同士で交換をしても意味がない。パンは食べるモノ、帽子はかぶるモノ。それぞれ「使用目的（種類）」が違う。だから、交換が成立したのである。

マイケルの行う労働を真似れば、誰がやってもパンができる。同様に、マドンナの行う労働を真似れば、誰がやっても帽子ができる。すなわち、労働には「量」のほかにもう一つ、「質」という側面があるのだ。

頭脳肉体労働という意味では、二人とも投下した量は一日だが、マイケルの労働はパンを作るためのモノであり、一方のマドンナの労働は帽子を作るためのモノであった。すなわち、二人の労働の「質」、いや、質でピンとこなければ「労働の種類」と言葉を置き換えてもいいが、商品を生産するための労働の種類が、マイケルの場合はパン、マドンナの場合は帽子と、異なっているのがポイントだ。

こうして、労働の「質」、すなわち「労働の種類」は、商品になったときに、商品の「使用目的（種類）」として浮き彫りになる。





-----

マルクンが続ける。

「このように、労働には二面性があるって、その結果、それが投影されて商品も二面性を持つのです。この点について、お二人はどう思いますか？」

僕は正直、目からうろこが落ちた。これまで考えたこともなかったが、「言われてみればなるほど！」という気分だった。しかし、エリナは心もち不満気に吐き捨てた。

「そんなの当たり前じゃない」

「まあ、いろいろな感想があると思いますが、このことは、実は経済学における歴史的な大発見であり、資本主義経済の基礎中の基礎となる真理なんですよ。ということで、もう一度あゆみさんと來未さんにご登場願ひましょう」

-----

さて、三年間、一日も休まずに勉強を頑張ったあゆみさんと來未さん。ここでは、次の三つを前提としよう。

一つは、英語もフランス語も言語としての難易度はまったく同じとする。

一つは、二人の外国語の習得能力はまったく同じとする。

一つは、二人の学習方法に優劣はない。

こう仮定すれば、あゆみさんの英語の能力と、來未さんのフランス語の能力は同等である。なぜなら、二人が投下した勉強の「量」が同じだからだ。

では、それを踏まえて、ここで、「労働」の場合と「外国語の勉強」の場合を比較してみよう。

●労働の場合

労働時間

→

商品の「価値」として浮き彫りになる

●外国語の勉強の場合

勉強時間

→

外国語を話す「能力」として浮き彫りになる

また、もう一つ、「労働」の場合と「外国語の勉強」の場合について次の比較もしておこう。

●労働の場合

労働の種類

→

どのような商品が完成するのか（パンなのか帽子なのか）、商品の「使用目的（種類）」として浮き彫りになる

●外国語の勉強の場合

勉強の種類

→

どのような外国語が話せるのか（英語なのかフランス語なのか）、外国語の「種類」として浮き彫りになる

-----

「どうですか？ ここまでくれば、私が 17 ページで例の『胸やけのする』フレーズを持ち出した理由がわかったんじゃないですか？」

僕たちは二人とも無言だった。もっとも、同じリアクションではあるが、僕とエリナの「無言」は、少し意味が異なっていた。どうやら、エリナは完全に理解したようだ。だが、一方の僕は、「多分、理解できたかな……」というレベルだった。

そして、僕の心中はどうやらマルクンにはお見通しのようなであった。

「では、もう少し補足しましょう。もう一度、あゆみさんと來未さんの話に戻りますよ。

さて、あゆみさんの英語の能力。かたや、來未さんのフランス語の能力。両者は等しい

上に、二人が話せる外国語は異なっていますね。ならば、二人の能力が交換できればいいのですが、多喜二くん、そんなことは可能でしょうか？」

「もちろん不可能ですよ。だって、能力は脳内や肉体内に留まっていて、外界には存在していませんから」

「エクセレント！ 大正解です。補足の必要もありません。ちなみに、経済学の世界では、そうしたモノは『商品』とは呼びません。

あゆみさんが来未さんのために英語で通訳してくれた。

そのお礼に、来未さんはあゆみさんのためにフランス語で通訳してあげた。

こうして、能力がアウトプットされれば、たとえそれが目に見える形の生産物ではなくても交換は成立します。ちなみに、このような商品を、私たちは普段、『サービス』と呼んでいます」

「要は、エステとか、マッサージみたいな商売ね」とエリナ。

「ワンダフル！」

マルクンはかなり嬉しそうだ。ここは僕も負けてはいられない。

「サービスという商品か。じゃあ、キャバクラやソープランドもそうだね」

「スパシーバ！」

おい、マルクン。それ、ロシア語で「ありがとう」だろ。

僕は突っ込もうと腰を浮かせたが、それより早く、エリナのビンタを喰らっていた。

「いずれにせよ、これまでの説明から、次のようにいえることは理解できますね？」

そして、マルクンは黒板に次のように書いた。

—— 「商品」とは、「価値」と「使用目的（種類）」を持ち、かつ、交換の対象となるモノ ——

僕も、この一文には大納得だ。

「では、この資本主義経済の基礎中の基礎となる真理を学んだところで、もう一度、17ページのあのフレーズを思い起こしてみましよう」

—— 交換とは、異なる使用目的を持つ、同じ価値の商品同士でのみ成立する経済行為である ——

異なる使用目的。これは、パンと帽子では使用目的（種類）が違ったから、マイケルとマドンナは交換ができた、ということだな。同じ種類のモノを交換しても意味がないものな。

そして、同じ価値。これは、マイケルもマドンナも、労働時間が同じ一日だったから交換できたわけだ。ちなみに、二回目は、マイケルはマドンナの三倍働いていたために、交換は成立しなかった。

「どうですか？ ちんぷんかんぷんだったこの一文が、なにか、もう頬ずりしたいくらいにかわいいものに思えませんか？」

「別に、頬ずりなんてしたくないわ」とエリナ。

「それに、かわいくもないよ」と僕。

しかし、僕たちは異口同音に声を発した。

「でも、完璧に理解できました！」

僕たちの笑顔を見て、マルクンも相好を崩した。

「サランヘヨ！」

それは「愛してる」だろ……。韓国語だよ、マルクン……。

「では、今日はここまでにしましょう」

【エピソード3のまとめ】

●労働には二面性がある。

一つは、労働の「量」であり、これを「頭脳肉体労働」と呼ぶ。

もう一つは、労働の「質」であり、これを「労働の種類」と呼ぶ。

●「頭脳肉体労働」の量（労働時間）は、商品の「価値」として表される。

⇒ 商品には、「労働時間」が内在している。

●「労働の種類」は、商品の「使用目的（種類）」として表される。

⇒ 商品には、「労働の種類」が内在している。

●商品の「価値」が同じならば、両者を公平に交換することができる。しかし、この場合、商品の「使用目的（種類）」が同じであったら交換する意味がない。すなわち、使用目的（種類）が異なって、かつ、価値が同じならば、商品同士の交換が成立する。

## エピソード4 本当に、商品の価値は労働時間だけで決まるのか？

前回のマルクんの講義の最後で、僕は「完璧に理解できました」と答えた。決して強がりではなく、そのときは本当にそう思った。

—— 「商品」とは、「価値」と「使用目的（種類）」を持ち、かつ、交換の対象となるモノ ——

百円という「価値」の鉛筆には、「書く」という「使用目的」がある。だから、鉛筆は「商品」である。

そう理解した。

それに、マルクんが、のっけから持ち出した次のフレーズにも大納得だった。

—— 交換とは、異なる使用目的を持つ、同じ価値の商品同士でのみ成立する経済行為である ——

ところがである。その夜、マルクんの解説を脳内でリピートしているときに、ある疑問に直面してしまった。

そして今日、その疑問を抱いたまま、また、マルクんの講義を受けようとしている。だが、これでは魚の小骨が喉につかえたような気分だ。それに、この疑問を放置したままでは、この先の講義が理解できるかも心もとない。しかし、僕は前回、言ってしまったのだ。「完璧に理解できました」と。

さて、どうしたものか。前言を翻して質問するか？ だが、実は、僕はそうしたことにしては臆病なのだ。お目当てのCDが見つからずに、店員に聞けば一分で見つかるものを、三十分も自力で探したこともある。

「多喜二くん。どうしたんですか？ 浮かない顔してますよ」

突然、マルクんに話しかけられ、僕は思わず、「あ、いや」と口ごもった。

「あ、多喜二。前回の講義でわからないところがあるんでしょう？」

エリナの問いにも口ごもると、彼女が続けた。

「じゃあ、マルクんに聞けばいいじゃない。まったく。こういうことになると、多喜二、てんでチキンなんだから」

「チキン？　なんで俺が鶏なんだよ！」

「違うよ。チキンは『弱虫』ってこと」

エリナのこの一言は癪に障った。

「なんで俺が弱虫な鶏なんだ！　まったくトサカにくるな！」

「ハハハ。多喜二くん、上手いですね。鶏だけにトサカですか。それより、質問はなんですか？」

「あ。あの……、いいですか、聞いても？」

「結構、結構、コケコッコー！」

張り倒すぞ、マルクン。

僕の疑問はこうだ。前回のマルクンの講義では、マイケルとマドンナの労働時間だけが交換の基準となっていた。でも、もしマドンナの編んだ帽子の絹糸が、マイケルがこねた小麦粉よりもずっと高価だったらどうなるのか？　すなわち、こうした、「材料費」を無視して商品の「価値」を決めてしまっているのだろうか？

「いや、今の質問は素晴らしいですね。では、今日の講義は内容を変更して、多喜二くんの疑問について解説しましょう」

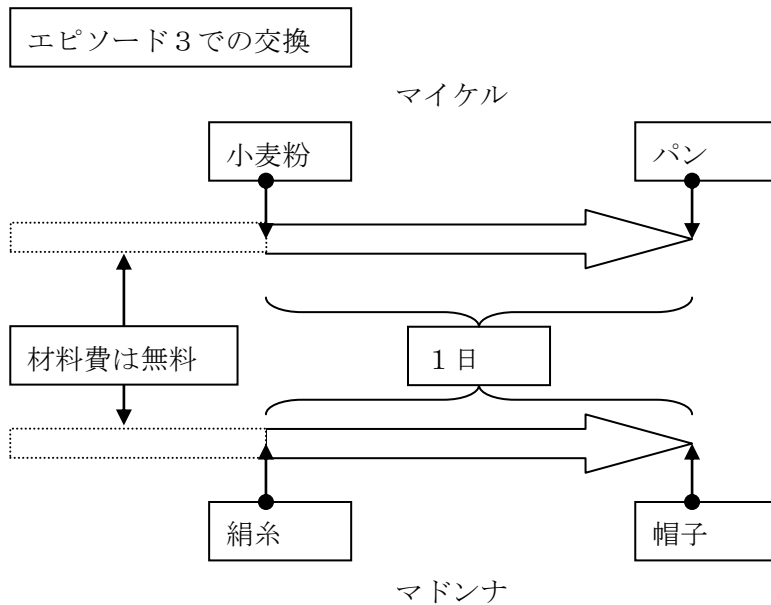
-----

エピソード3では、次のように解説した。

—— 頭脳肉体労働の「量」、すなわち「労働時間」が商品の「価値」を決め、その価値が同じならば交換が成立する ——

このこと自体は間違いではないが、エピソード3のマイケルとマドンナの例では、材料となる小麦粉と絹糸を、二人とも無料で手に入れたことを前提としていた。

図 4-1



では、こうした材料費を無視して商品の「価値」を決定できるのか。結論を述べれば、材料費を無視することはできない。これは、次のように仮定すれば明らかである。

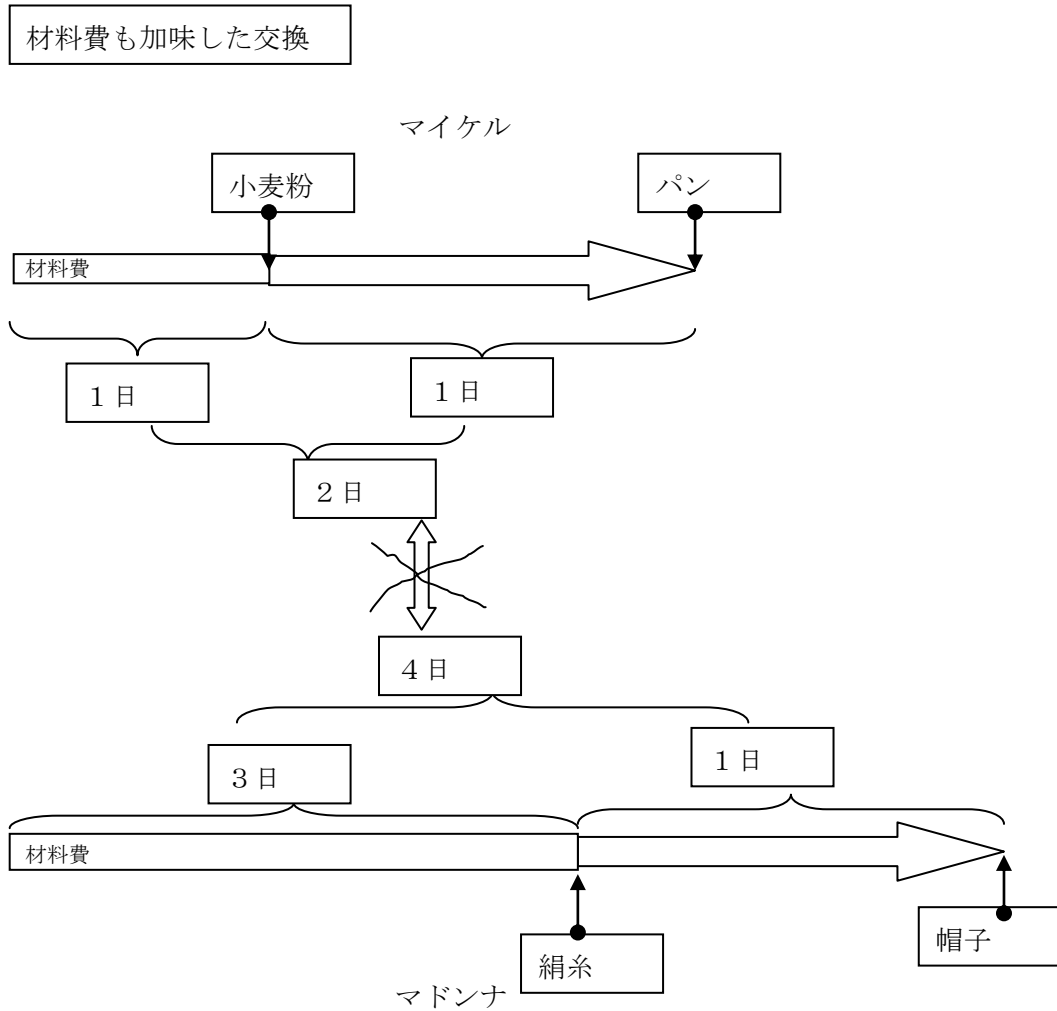
◆マイケルは、小麦粉を手に入れるために一日働き（ここまでが材料費）、さらに、その小麦粉でパンを作るために一日働いた → マイケルのパンの「価値」は、労働時間が「二日」

◆マドンナは、絹糸を手に入れるために三日働き（ここまでが材料費）、さらに、その絹糸で帽子を作るために一日働いた → マドンナの帽子の「価値」は、労働時間が「四日」

この図4-2のケースでは、マイケルのパンとマドンナの帽子の交換は成り立たない。



図 4-2



このように、商品の「価値」を考えるときに材料費を無視することはできない。それだけではない。たとえば、自動車を造るのであれば、材料費以外にも、工場の土地代、製造機械の購入代、減価償却費や水道光熱費などの諸経費がかかる。こうしたあらゆる経費に、エピソード3で紹介した労働時間が加味されて、そのトータルが商品の「価値」になるわけだ。

ちなみに、このトータルの費用を「生産費」と呼ぶが、以上のことから、厳密に定義すれば、商品の「価値」を決定するモノは「生産費」であることがわかる。

$$\text{商品の価値} = \text{生産費}$$

しかし、商品の価値を考えるとときに、その決定要因を生産費にまで広げてしまうと、「サラリーマンが貧乏な理由」も「資本家が金持ちな理由」も、その本質がぼやけてしまう。

理由はいくつかあるが、代表的な理由として以下のものを挙げたい。

そもそも、一人のサラリーマンが、もしくは一つのサラリーマンの集団（一企業）が、無の状態から最終生産物を作るケースは稀である。おのおのは、無から、原材料を仕入れ、それを最終生産物にして販売するまでのいずれかの過程を担っているに過ぎず、商品は分業によって生産、販売されている。

ところが、着眼点を「生産費」にまで拡大してしまうと、「A」というサラリーマンの労働を観察したいときに、その他のサラリーマンの労働やもろもろの経費なども観察対象としなければならない、これでは、「A」の労働の観察にたどりつくのが逆に困難になる。

であるならば、最初から「A」の労働だけを切り取って、その「労働時間」が商品の「価値」に反映されている、というシンプルな前提で考えたほうがより理解が深まるであろう。

エピソード3で、材料費を無視して、マイケルとマドンナの労働だけに着目しているのは、そうした事情からである。

また、このように商品の生産のメカニズムをシンプルにしても、「労働時間」が商品の「価値」を決定し、「労働の種類」が商品の「使用目的（種類）」を決定しているというのは「最小単位の本質」、いわば細胞のようなものである。

すなわち、現実にはもっと複雑な連携で生産されている商品であっても、個々の細胞が分裂しているだけで、細胞そのものが変化してしまっているわけではない。

補足すると――。

ここに、「A」という生産工程と、「B」という生産工程があり、それぞれの部品を組み立ててできた「C」という商品がある。

この場合、次のようになる。

$$Cの価値 = Aの価値 + Bの価値 + Cの労働時間$$

「C」から見たら、「A」と「B」は「材料費」で、そこに新たに発生した「Cの労働時間」

も加味したものが「Cの価値」となる。このケースでは「A」と「B」の材料費は確かに無視はできない。

では、「Aという材料費」の価値を決めているものは一体なにか？ これは、あくまでも「A」を作るために要した「労働時間」である。それが「Aの価値」である。同様に、「Bという材料費（価値）」を決定しているのも、「B」を作るために要した「労働時間」である。

要するに、すでに価値を持った材料を加工する場合には「トータルな費用」、すなわち「生産費」が商品の価値となるが、それを各工程に分解したときには、「その工程で要した労働時間」がその商品の価値となる。

すなわち、作業工程のどこを観察するかだけの違いであって、次の二つが互いに矛盾しているわけではない。

$$\begin{array}{l} \text{商品の価値} = \text{生産費} \\ \uparrow \\ \downarrow \\ \text{商品の価値} = \text{労働時間} \end{array}$$

商品の「価値」を決定しているのは、「生産費」でもあり、また、「労働時間」でもあるわけだ。

-----

「いかがですか？ 多喜二くん」

マルクんの問いに、僕はにこやかに答えた。

「いや、すっかりしました。『生産費』が商品の『価値』を決めていること。しかし、生産費という概念では大き過ぎて焦点がぼやけるため、『労働時間』が商品の『価値』を決める、と考えたほうが理解しやすいこと。また、そう理解しても、生産の各工程では『労働時間』が商品の『価値』を決めているのだから、その考えを拡大解釈して生産工程全体に広げても別段、問題はない。そういうことですね」

「まあ、そんなところですよ。ここは、思い切ってそう理解してしましましょう。やれ、原

材料だ、中間商品だ、最終生産物だ、なんて議論は、少なくとも今の二人には必要のないものです」

「そうよね。中間商品、たとえば自動車の部品だって、それはメーカーから見たら中間商品でも、それを作ってる会社してみれば最終生産物だもんね。そんな考えを持ち込んだら、本質がぼやけるだけだわ」

うーん。さすがはエリナ。僕以上にマルクんの説明が腑に落ちているようだ。

「それから、エリナさんには必要のない説明だと思いますが、多喜二くんのために、念のため、最後に付け加えておきます」

なんじゃ、そりゃ。

「商品の『価値』を左右するのは、それを生産するために費やした『労働時間』です。したがって、労働時間が長いほど商品の価値は高まります。しかし、だからといって、ダラダラと時間をかけて作業をして生産された商品が、テキパキと短時間で作業をして生産された商品よりも価値が高くなることは断じてありません」

うん。それはそうだろう。

「商品の『価値』の実態として『労働時間』を考えるとときには、当然にして労働者の熟練度や労働環境を加味する必要があります。熟練した労働者が四時間で生産した商品と、不慣れな新人が八時間かけて生産した商品の価値が同じであるように、機械を使ってオートメーション化を図っている場合と、全工程を手作りで仕上げる場合も、両者の商品の完成度に違いがなければ、たとえ手作りだろうがその価値が高くなることはありません」

うんうん。それも当然だよな。

「すなわち、商品の価値は、社会的に見て平均的かつ一般的に必要とされる労働時間によって決定します。そして、この考え方を『労働価値説』と呼びます」

労働価値説？ へえー。要は、今まで僕たちは、その「労働価値説」を学んでいたわけか。そして、それを理解したということだな。

僕の顔がよほど満足気だったのだろう。マルクンは、笑顔で高声を発した。

「では、今日はここまでにしましょう」

#### 【エピソード4のまとめ】

- 「労働時間」に材料費や諸経費などを加味したモノを「生産費」と呼ぶ。

●商品の「価値」は「生産費」で決定する。

⇒ 商品の価値 = 商品の生産費

●ただし、生産工程を各々の単位で見れば、次の二つは互いに矛盾しない。

商品の価値 = 生産費

↑

↓

商品の価値 = 労働時間 ⇒ 本書は、便宜上この考え方を採用している

●商品の価値は、社会的に見て平均的かつ一般的に必要な労働時間によって決定する。

⇒ この考え方を「労働価値説」と呼ぶ。

## エピソード5 学校が教えてくれたあの需給曲線は嘘だったのか？

「労働価値説」を理解し、さて、今日はマルクンはなにを教えてくれるのかと、エリナとともに大学に向かった僕だが、そのエリナの様子がどこことなくおかしい。まるで、材料費のことが気にかかっていた前回の僕のように、腑に落ちない顔をしている。

教室に着くと、すでにマルクンが待っていた。

「ようこそ。エリナさん、多喜二くん。今日はいよいよ……」

だが、エリナが制する。

「ごめん、マルクン。実は、アタシも一つ、わからないことが出てきちゃって」

すると、瞬時にマルクンの顔が青ざめた。

「あ、エリナさん。その質問をされると、話がちょっとややこしくなりますよ」

「その質問」って、マルクンはすでに、エリナの疑問を予期しているのか？ ひょっとして、それくらい当たり前のことに僕だけが気付いていないのか？

「でも、これを解決せずに、先に進めないわ、アタシ」

その一言に、マルクンが「じゃあ、質問をどうぞ」と折れた。

「ねえ。アタシたち、義務教育では、『商品の価格は需要と供給のバランスで決まる』って教わらなかった？ ほら、需要と供給のグラフを見せられて」

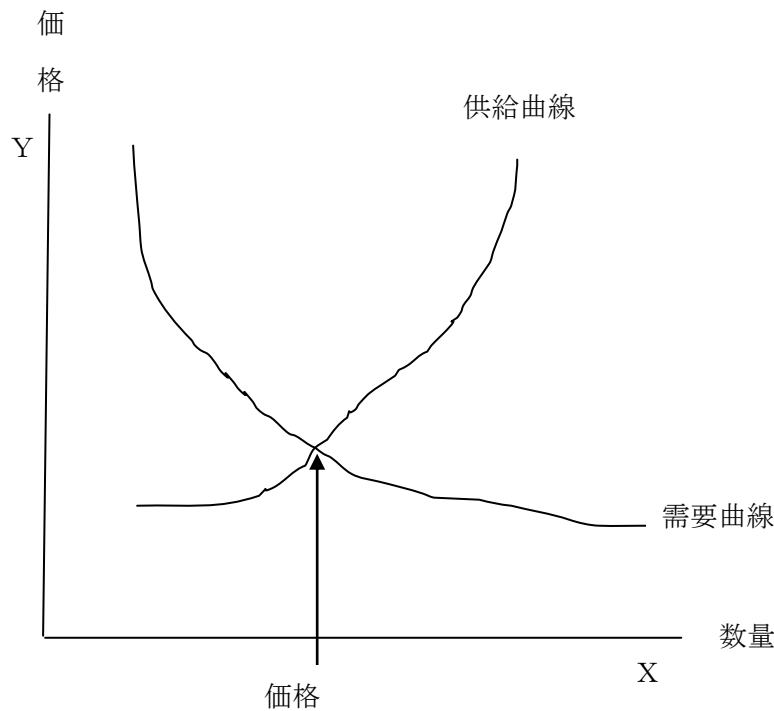
た、確かに！ 僕も中学校で「需給曲線」を習ったぞ。「商品の価格は需要と供給のバランスで決まる」。確かに教科書にはそう載っていた。

これは……、かなりやばい展開じゃないのか？ 今までマルクンが言っていた「商品の価値は頭脳肉体労働の量、すなわち労働時間で決まる」という考えと真っ向に対立する疑問だ。

エリナは、「労働価値説」を覆そうというのか？

自分の心臓の鼓動が高鳴るのが手に取るようにわかったが、その間に、マルクンは観念したかのように、見慣れたあの需給曲線グラフを黒板に書いた（図 5-1）。

図 5-1



「さすがは、エリナさん。そこに気付いちゃいましたか……。しかも、お世辞にも賢いとはいえない多喜二くんですら気付いた様子ですから、しかたありませんね。説明しましょう……」

僕は思わずこぶしを握った。

「ただ、これだけは言わせてください。今からする説明は、正直、難しいです。だから、二人とも理解できなくても構いません。本書をお読みのみなさんも、もし難しいと感じたら、遠慮なく 52 ページのエピソード 6 に進んでください。

別に、このエピソード 5 が理解できなくても、資本主義のメカニズムは理解できるので安心してください。むしろ、資本主義のメカニズムを隠ぺいするために用意されたのがこの需給曲線だと私はうがった見方をしているくらいですので、私としてはこのエピソード 5 を読み飛ばすことをお勧めします」

本書をお読みのみなさん？ エピソード 5、6？ マルクンはなにを言い出すんだと思ったが、なぜか突っ込む気になれない……。

「では、このグラフを見てください」とマルクン。

-----

図 5-1 の需給曲線について簡単に説明しよう。

まず、需要曲線だが、右下がりのために誤解されがちだが、これは、需要は、X軸に沿って、右に行くほど「数量」が増えることを意味している。決して、右に行くほど需要が減るわけではない。誰も高いモノなど買いたくはない。すなわち、需要が増える（数量が増える）ためには、価格は下がらなければならない。だから、需要は右下がりの曲線で表される。

一方の供給曲線はわかりやすいだろう。これも、需要と同様に、右に行くほど「数量」が増えることを意味している。いうまでもないが、価格が高ければ高いほど、商品を生産する会社の利益も大きくなる。そして、多くの会社が利益欲しさにその商品を生産することになる。すなわち、供給が増える（数量が増える）ためには、価格は需要の場合とは逆に今度は上がる必要がある。結果、供給は右上がりの曲線で表される。

そして、その二つの曲線の交点、すなわち、需要量と供給量が均衡するところで商品の価格は決定されることをこのグラフは示している。

-----

「さて、ここまでの話で、もし二人が次のことに気付いていたら、これはもう脱帽です」  
「どんなこと？」とエリナ。

「エピソード3で、私は、商品の交換を成立させるための条件は『価値』であると述べました。しかし、需給曲線の説明で私が使った言葉は『価格』です。二人も、需給曲線の質問をするときに『価格』という言葉を使いました。しかし、これは作者の性格が大雑把だからではありません」

作者？ また、訳のわからないことを……と思いつつ、僕は受け流した。

「私は、ちゃんとした理由があつて『価値』という言葉と『価格』という言葉を使い分けています」

「なぜですか？」と思わず僕が聞く。

「『価値』と『価格』は、実は似て非なるモノだからです。そして、この異なるモノを同じモノと勘違いしてしまうと、このような自己矛盾に陥ってしまいます」

言って、マルクンは黒板に次のように書いた。



図 5-2

エピソード3の二人：

商品の「価値」は労働時間で決まるのか！

↑

<矛盾> ← 価値 = 価格(?)

↓

現在の二人：

商品の「価格」は需要と供給のバランスで決まるのか！

「では、この矛盾を解消する作業に入りますが、ここで大切なことを前もって伝えます。  
今から私は、エピソード3で説明したことを一度、否定します」

「否定!？」と思わず二人で声を上げた。

「はい。しかし、その否定を再検証して、もう一度、エピソード3の説明を肯定します」

「なぜ、そんな面倒なことを？」とエリナ。

「それは、これからの説明を聞けばわかります。仮にわからなかったら、気にせずに 52  
ページのエピソード6に飛んでください。それでも、資本主義のメカニズムを理解する上  
でなにも不都合はありません。そもそも、こうして二人が混乱していること自体、義務教  
育の思う壺だと私は遺憾に思っているくらいです」

マルクンはそう吐き捨てる、幾分、上気した顔で解説をはじめた。

-----

まず、エピソード3が導き出した次の結論をもう一度ご覧いただこう。

(A) 商品の「価値」が同じならば両者を公平に交換できる。

この(A)の結論だが、厳密にはこれは「嘘」である。しかし、「嘘も方便」ではないが、  
まずは(A)の結論で納得することが極めて重要だ。

言うなれば、中学生のときには、「すべての数は二乗すれば正の数になる」と教わるが、  
高校生になったら、「数学の世界には二乗すると負の数になる虚数というモノがあります」

とどんでん返しを喰らうのと同じだ。これは、中学生の学力では「すべての数は二乗すれば正の数になる」と一度納得しておかないと、いつまで経っても「負の数と負の数の掛け算」が理解できない。すなわち、これは次のステップに進むための親心であり、必要不可欠な「嘘」といってもいいだろう。

同様に、「商品の価値」について考察していく過程においては、まずは（A）の結論で一度、納得しておくのが最適な手順といえる。そして、それを踏まえて、（A）の結論を次のように言い換えて検証するのが望ましい。

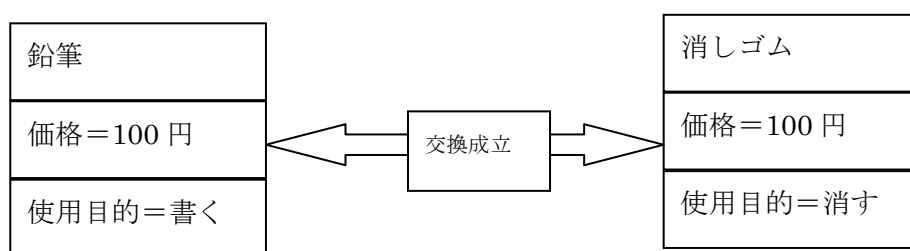
（A）商品の「価値」が同じならば両者を公平に交換できる。

↓

（B）商品の「価格」が同じならば両者を公平に交換できる。

この（B）については、説明の必要はまったくないだろう。「価格」が百円の鉛筆と、「価格」が百円の消しゴムなら、公平に交換できることはいうまでもない。商品の「使用目的（種類）」も、鉛筆は書くモノ、消しゴムは消すモノと異なっているため、ちゃんとした交換理由もある。

図 5-3



では、なぜ、（A）では間違いなのか？ いや、そもそも、「価値」と「価格」は具体的に何がどう異なるのだろうか？

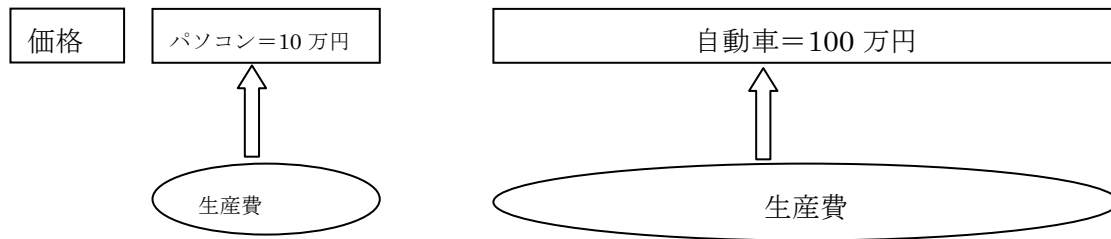
エピソード4の繰り返しになるが、あくまでも商品の「価値」とは「生産費」のことである。これはもう、結論が出ている（33ページ）。

商品の価値 = 生産費

では、もう一方の「価格」について考えてみよう（図5-4）。

ここにパソコンと自動車がある。パソコンの「価格」は一台、十万円なのに、自動車の「価格」は一台、百万円。では、この十倍の差を発生させているモノはなにか？ この差は商品の「生産費」の差であることは疑いようがない。パソコンと自動車では、明らかに生産に必要な費用が違う。そして、これが「価格」の差となっている。

図 5-4

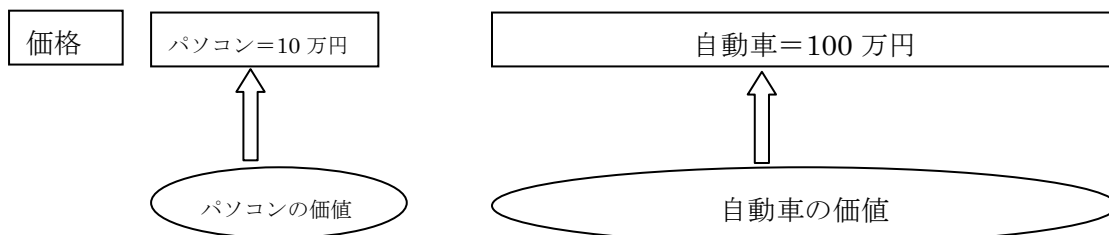


では、くどいようだが、もう一度、次の一文を見てほしい。

商品の価値 = 生産費

そう。「生産費」とは、商品の「価値」と同義である。すなわち、図5-4は、図5-5のように書き換えることができる。

図 5-5



そして、以上の説明から、次の結論がおのずと導かれる。

商品の「価格」を決定している主要因は商品の「価値」である。

では、このことを踏まえて、身近な例で、こんな経験はないだろうか。

- ・まったく同じ生産費で製造されているパソコンなのに、A店では十万円で、B店では九万円だった。
- ・パソコンが、半年経ったら十万円から九万円に値下げされた。

このように、商品の「価格」は、「生産費（商品の価値）」以外の理由で変動することがある。だからこそ、「価値」と「価格」は似て非なるモノなのだ。

では、ここで「需要と供給」の話に戻ろう。

たとえば、需要の立場から見たら必要なのは百個なのに、さまざまな会社が千個生産してしまった場合を想定してほしい。この場合、当然だが「価格」の下落が発生する。「価格」を下げることによって、他社ではなく自社の商品を買ってもらうためだ。

しかし、このとき、次のような状況に陥ったらどうであろうか。

商品の価格 < 生産費（商品の価値）

これでは、作れば作るほど会社は赤字になる。よって、そうならないように、会社は生産量を減らし、やがて「価格」は、「生産費（商品の価値）」と一致するか、もしくはその近辺に落ち着こうとする力が働く。

逆に、需要に対して供給が追いつかないときには、消費者は「高くても買いたい」という気持ちになるので、「価格」は高騰し、次の状況となる。

商品の価格 > 生産費（商品の価値）

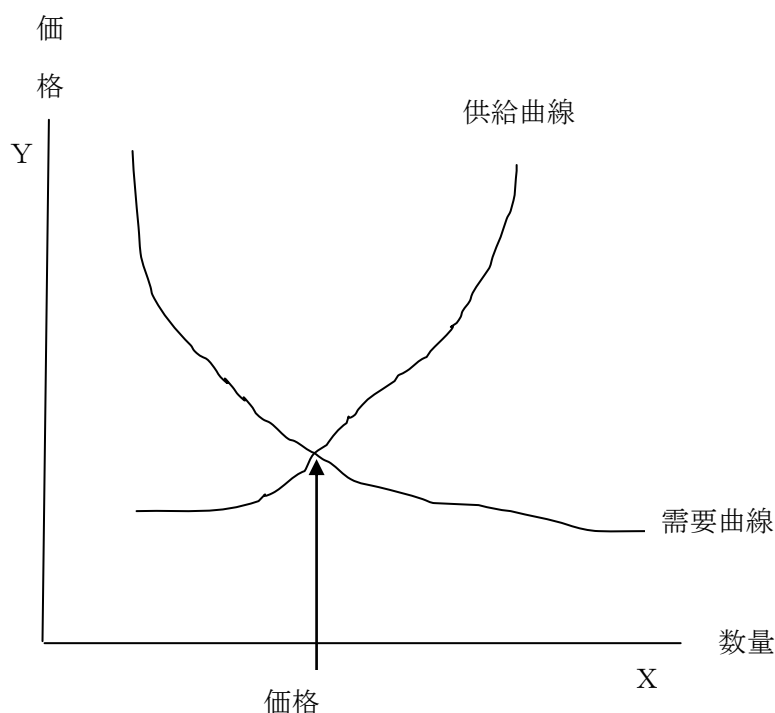
作れば作るほど会社は儲かるので、次々に商品が生産されるが、こうした状態もやはり

長続きしないことはおわかりいただけるだろう。やがて、「価格」は下落をはじめ、結局のところ「生産費（商品の価値）」と一致するか、もしくはその近辺に落ち着くわけである。

こう考えると、確かに、「需要と供給のバランス」と「価格」は無関係ではない。

では、それを踏まえて、もう一度、39 ページの図 5-1 を下に掲載するので見てほしい。

図 5-1



義務教育で教えているこの需給曲線グラフが言わんとしていることは明白である。

「価格」は需要と供給のバランス、すなわち、両者の均衡によって決定される

これは、確かに真理だろう。しかし、百パーセント真理なのだろうか？ 本当に価格を決定しているのは需給量だけなのだろうか？

たとえば、ビールを考えてほしい。それは、安ければ安いほど売れる（需要量が増加する）ことは確かだが、別に、「価格」は同じでも、夏になればビールの需要量は増加する。この場合、需要を決定しているのは「価格」ではなく気候である。

もっと顕著な例で、映画なんかはどうだろう。「面白い！」となれば、値下げなどしなく

でも大ヒットになる。逆に、「つまらない！」となれば、半額にしても誰も見向きもしない。  
この場合も「価格」と需要の相関関係はまったくない。

すなわち、価格だけで需要量や供給量が変わると考えるのは、あまりに発想が単純過ぎるのではあるまいか。もっと踏み込んで誤解を恐れずに言えば、あまりにシンプルな図5-1の需給曲線グラフでは、「価格決定」のメカニズムを解明する役割を果たし切れていないと感じる。

さて、そろそろこの解説にもくたびれてきたと思うが、せつかくここまできたのだから、もう少しお付き合いいただきたい。

「価格」は、需要と供給のバランスで決定する「こともある」。この点をご理解いただけたいと思うが、想像してみてください。

需要と供給のバランスがどうなろうと、十萬円のパソコンが百萬元になることはないし、百萬元の自動車が十萬元になることもない。

そう考えると、「パソコンは十萬元」とか「自動車が百萬元」といった「価格」の「変動幅」、そして、最終的に何萬元に落ち着くのかといった「価格」の「中心点」。この二つの要素を決定しているのは、やはり「生産費（商品の価値）」以外にありえない。

さて、44 ページでは、エピソード3で解説した次の説を否定した。

(A) 商品の「価値」が同じならば両者を公平に交換できる。⇒ 間違った説

そして、42 ページで、次のように訂正した。

(A) 商品の「価値」が同じならば両者を公平に交換できる。

↓

(B) 商品の「価格」が同じならば両者を公平に交換できる。

しかし、商品の「価格」の「変動幅」と「中心点」を決めているのが「生産費（商品の

価値)」である以上、次のように帰結させても、決して暴論ではないのではないか。

(A) 商品の「価値」が同じならば両者を公平に交換できる。⇒ 正しい説

-----

エリナが、多少苛立ちながら言葉を発する。

「結局、(A) は正しい、って、巡り巡って『エピソード3の結論は正しい』に戻るわけね」  
「そうなんです。だから、この話はあまりしたくなかったんです。

そもそも、『価格』という概念で、『資本主義世界ではサラリーマンが貧乏で資本家が金持ちな理由』の説明はできません。そのメカニズムを解明してくれるのは、あくまでも商品の『価値』なんです。

それなのに、義務教育で『需給曲線』とか『価格』なんて教えるものだから、なおのことみんな、『資本主義のメカニズム』がわからなくなってしまうんです。

実は、私の一連の講義で、今回の説明が一番難しい部分です。今後は、余裕で理解できますので安心してください」

「はあー。一番難しいことを、あえて義務教育で僕たちは習わされるわけか……。そして、簡単なことは教えてもらえない……」

「本当に、なにか恠意的なものを感じるわね」

エリナが吐き捨てた。なるほど。先ほどのエリナの苛立ちの原因はこれか。

「とにかく、需給曲線とか価格とかに惑わされないでください。だって、考えてみてください」

マルクくんも目が真剣だ。

「社会主義の世界ならば、『パソコンが欲しい人が千人いるので千台作りなさい』と、需要量に基づいた供給は可能です。

でも、資本主義の世界においては、そもそも需要と供給が一致するはずがありません。すなわち、『価格』が上昇しようが下落しようが、それは変化の過程に過ぎず、そうした変化が収束したときには、上昇と下落はお互いに相殺され、結果的には『価値（生産費）』に応じて商品交換が行われているんじゃないでしょうか」

確かに、「価格」はもろに需給関係の影響を受ける。いや、気候といった外的要因も関係

したりする。そして、そのたびに価格は変動するが、そうした外的要因の影響を受けない安定した論拠となりうるもの。それこそが「価値（生産費）」なんだな。

要するに、商品の「価格」は、需給バランスや外的要因によって変動するが、おのずと「価値（生産費）」に引き寄せられていく、ってわけか。

「いずれにせよ、私はエピソード4で述べたとおり『労働価値説』の立場を取っているので、商品の『価格』を決定するのは商品の『価値』、すなわち『生産費』であり、必然的に価格決定のイニシアチブを握るのは生産者だと考えています。

しかし、『限界効用論』とあって、消費の側から『価値』を考え、価格決定のメカニズムを解明しようと試みている学者もいます」

そして、マルクンはため息を一つつくと続けた。

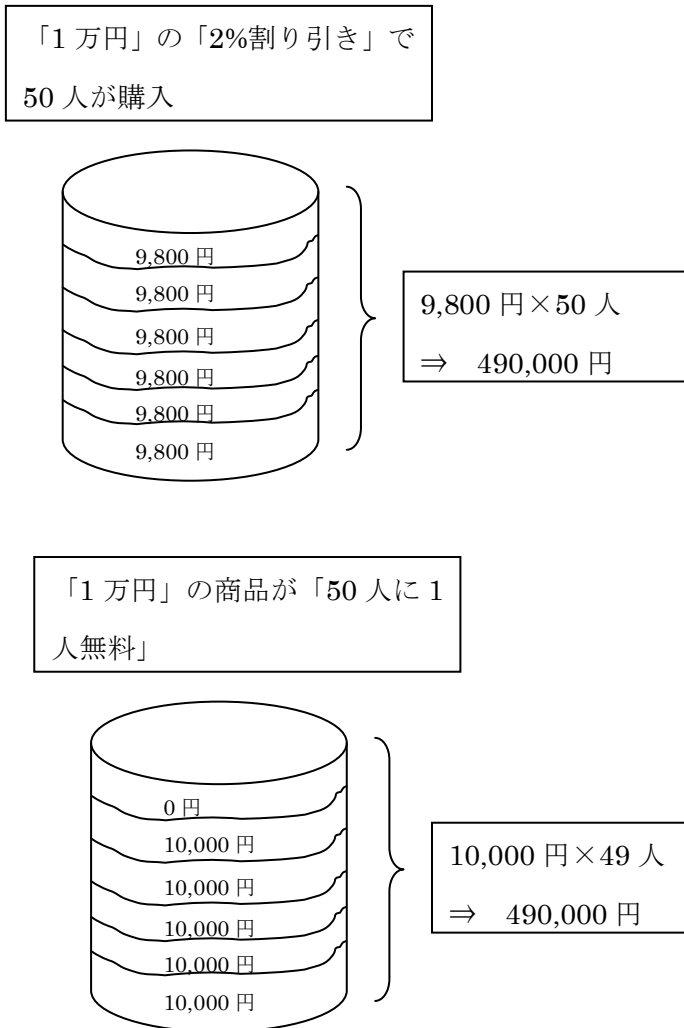
「ただ、消費行動そのものや、消費の側から価格の本質を経済学的な理論として確立するのは不可能だろうと考えている経済学者が少なくないのは事実です」

「どうして？」とエリナ。

「だって、『人間の心理』という影響を受けますから。たとえば、『二%割引』とセールをしてもまったく売れなかった商品が、『五十人に一人無料』としたら突然売れ出した例もあります。だけど、『二%割引』も『五十人に一人無料』も、店の立場では同じことですよね（図5-6）」



図 5-6



「そして、『店の立場で同じ』なら、消費者にとっても同じことなわけです。私なんかむしろ、『全員二%オフ』のほうが嬉しいですが、多くの方は『五十分の一の確率で無料』を好む。そんな射幸心をあおって需要が増加するなんて、こんなの経済学ではありません。むしろ心理学の分野です。だからこそ、二人には『価格』のことは意識せずに、あくまでも商品の『価値』と向き合ってほしいのです」

マルクンは、気のせいかな少し寂しそうな表情を見せたが、すぐに笑顔を作ると僕に問いかけた。

「さて、多喜二くん。今日の講義は理解できましたか？」

「ええ、もちろん！」

「ほお、それは素晴らしい！ 実は、この『価値』と『価格』の違いは、とても高名な経済学者でさえ、研究当初は不完全な解釈のまま論文を発表してしまったくらいなんですよ。もともと、その後、その違いを解明し、それがきっかけで資本主義の研究が急速に進んだのですが、それを一発で理解するとは……」

そして、マルクンは肩をすぼめると続けた。

「凄い吸収力ですね、多喜二くん」

「ええ。だから、僕、エリナに『サイドギャザー多喜二』って呼ばれてるんです」

「サイドギャザー多喜二？」

「あなたの吸収力は、まるでサイドギャザー付きナプキンみたいね、って。ハハハハ！」

「……」

「ハハハ！ ハハ、ハ……」

エリナの強烈な五往復ビンタを喰らい、僕は遠く意識の中でマルクンの締め言葉を聞いていた。

「……。今日の講義はここまでにしましょう」

#### 【エピソード5のまとめ】

- 商品の「価値」と「価格」は似て非なるモノである。
  
- 商品の「価格」は需給バランスや気候などの外的要因で変動するが、商品の「価値」は「生産費」を基にしている以上、基本的に一定である。  
  
(1) 商品の「価格」を決める主要因は、その商品の「価値（生産費）」である。  
⇒ 需給バランスや外的要因がどうなろうと、それは単なる変化の過程であり、結局は商品は「価値」に応じて交換されている。
  
- (1)の結論から、次の(B)はもちろん、(A)を正しいと仮定しても不都合はない。  
  
(A) 商品の「価値」が同じならば両者を公平に交換できる。 ⇒ ○  
  
(B) 商品の「価格」が同じならば両者を公平に交換できる。 ⇒ ◎

●以上を踏まえると

<エピソード3>

商品の「価値」は労働時間で決まる

と、

<義務教育で習う需給曲線>

商品の「価格」は需要と供給のバランスで決まる

は、互いに矛盾していないことがわかる。そもそも、義務教育では商品の「価格」決定のメカニズムだけを教え、商品の「価値」については言及していない。

## エピソード 6 なぜ、お尻も拭けない一万円札がトイレットペーパーよりもありがたいのか？

さて、マルクんの六回目の講義である。僕とエリナは、揃って教室に入ったが、すでに教壇に立っているマルクんが、なぜか浮かない顔をしている。

前々回は僕が、前回はエリナが、マルクんの講義に疑念を抱いてしまい、つい困惑顔になってしまったが、今日は、講師であるマルクんの様子がおかしい。

とりあえず、僕が「マルクん」と呼びかけてみる。

「あ、ああ。多喜二くん。それに、エリナさん。来てたんですか……」

「そりゃあ、来ますよ。今日は講義の日ですから。それより、なにかあったんですか？」

「え？ 実は、今日、このマルクんとしたことがちょっと懐が寒くてね。さっきコンビニに寄って五万円をおろしたんです」

「わかった。マルクん、あなた、五万円おろしたら、残高が一桁しかなかったんでしょう。これだから貧乏講師は」

「ちょっと、エリナさん。勝手に決め付けないでください。まあ、確かに、残高の桁幅が卒倒するほど短かったのは認めます。でも、このマルクん、そんなことで落ち込む男ではありません」

「じゃあ、なにがあったの？」

エリナの問いに、マルクんは空咳をしてから返答した。

「いえね。ATMにキャッシュカードを入れて暗証番号を打ち込み、『5』『万』『円』と押して『確認』ボタンを押したんですが、その直後に事件が起きたんです。このマルクんともあろうものが、思わずその場にへたり込みました。なぜだかわかります？」

「いえ、全然」と僕とエリナ。

「確かに、金は五万円ありました。『5』『万』『円』と押したのだから当然です。しかし、一万円札が四枚しかないんです。残りは……、なんと、二千円札が五枚なんですよ！」

「二千円札？ そんな紙幣あったっけ？」

僕はエリナに聞いた。

「あるわよ。西暦 2000 年、『ミレニアム』を記念して発行された紙幣じゃない。でも、確かに、この五、六年、見たことがないわね」

「ふーん。で、その二千円札ってまだ使えるの？」

すると、マルクんが五枚の二千円札を机に置いて身を乗り出した。

「そう！　そこなんです！　ま、まだ、この二千円札って使えるんでしょうか？」

「使えるに決まってるじゃない」

「本当ですか？　このマルクンが知らない間に、『二千円札は無効』なんて法律は施行されていませんか？」

「されてない！」

エリナが眼光鋭く言い放つと、マルクンは幾分、冷静を取り戻した。

「そうですか。いや、実は、今日の講義の内容は『貨幣』なんですけど、そんな日に二千円札に巡り合うなんて、二人もラッキーですね」

「なんで、アタシたちがラッキーなのよ」

「いえ。先ほど私が落ち込んで見せたあの演技。あのアカデミー賞ものの熱演だけで今日の講義はおしまいにしてもいいくらいです。それくらい大切なことを、私は神がかり的な振る舞いを通して二人に実演して見せたわけです」

アカデミー賞ものの熱演だか神がかり的な振る舞いだか知らないが、お前、リアルにうろたえてただろう、マルクン。

ともかく、早く講義に入ってくれよ。

-----

二千円札が五枚でも一万円は一万円である。当たり前だが、二千円札があれば二千円の買い物ができる。すなわち、二千円札には「二千円の価値」がある。

しかし、あまりに二千円札が流通していないがために、その「当たり前のこと」について疑念を抱く。一見ばかげているようだが、実は、この疑念こそが「貨幣とはなにか？」という「貨幣論」の根本的な概念そのものなのである。

ATMが吐き出した二千円札を見てなぜ不安に駆られるのか。それは、二千円札を「信用」していないからである。

すなわち、こういうことだ。

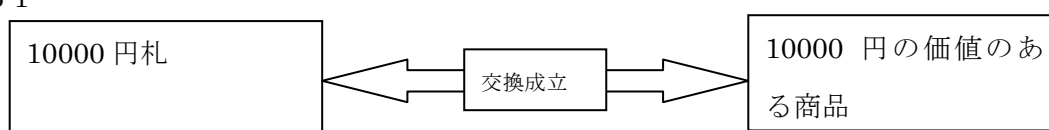
貨幣の「価値」を支えているものは「信用」に過ぎない。

言い換えれば、その「信用」を失えば、貨幣は無価値になり、単なる紙切れ同然になる。

では、すっかり見る事のなくなった二千円札ではやはり気持ちが悪いので、ここからは一万円札で話を進めよう。

繰り返しになるが、一万円札を持って店に行けば、一万円の商品が買える。また、一万円の価値のある商品を作って売れば、一万円札がもらえる。すなわち、一万円札には一万円の「価値」がある。これは疑いようのない事実である（図6-1）。

図 6-1



さて、この当たり前の事実を再確認したところで、もう一度、「商品とはなにか？」を思い出してみよう。「忘れてしまった」という人は、17 ページのエピソード3をもう一度読み返していただきたい。

「商品」とは、「価値」と「使用目的（種類）」を持ち、かつ、交換の対象となるモノ。

これこそが「商品」であった。

となると、こんな疑問が必然的に生じる。

「では、貨幣も商品なのではないか？」

結論から述べよう。

「貨幣」は「商品」ではない。

再三、恐縮だが、確かに貨幣には「価値」がある。一万円札ならば一万円の価値がある。

また、貨幣によって売買ができる。すなわち、貨幣は「交換の対象」でもある。

しかし、これだけではまだ商品の条件を満たしていない。貨幣を商品と呼ぶためには、貨幣に「使用目的」がなければならない。

問題はここである。パンには「食べる」という使用目的がある。帽子なら「かぶる」という使用目的がある。だからこそ、パンも帽子も商品なのである。

では、貨幣はどうだろう。

ちなみに、「モノを買う」というのは「使用目的」ではない。単なる「商品との交換」である。

紙だからメモ用紙になる？ 一万円札のどこにそのようなスペースがあるだろうか？

紙だからお尻が拭ける？ もし、一万円札を備え付けたトイレがあったら教えていただきたい。

そう。「使用目的」という観点から見たら、一万円札はお尻も拭けない、トイレットペーパー以下の存在なのである。

硬貨にせよ紙幣にせよ、「使用目的」がまったくない。別の言い方をすれば「有用物」ではない。

したがって、貨幣は商品ではない。

いかがだろうか。当たり前だと思う人もいるかもしれないが、実は、義務教育ではこのことは教えてはくれない。

さしずめ、義務教育で教わる貨幣の役割といたら、次のようなものではないだろうか。

- (A) 商品の交換（流通）の仲介をするモノ
- (B) 商品の価値を共通の尺度で表現するモノ

もちろん、(A) も (B) も、貨幣の大切な役割である。では、それを証明するために、ここで少しエピソード3に戻ってみよう。

22 ページでは、マイケルとマドンナはパンと帽子を交換していたが、実は、あの交換が成立した背景には、あの場では述べなかったある条件が満たされていた。

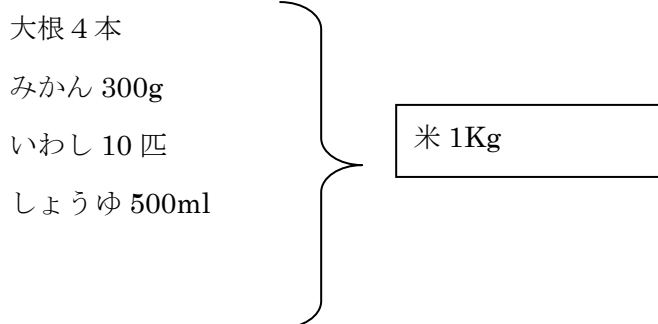
- ・マイケルは帽子が欲しかった
- ・マドンナはパンが欲しかった

すなわち、お互いがお互いの商品を欲しいと思ったから交換が成立したわけだ。したがって、もし、マイケルが欲しかったのが帽子ではなくマフラーだったら、彼は自分のパンと同じ「価値」である「一日の労働時間」で作られたマフラーを持った人を探さなければならない。そして、このように「交換欲求」が偶発的にしか合致しないようでは、交換はなかなか成立せずに、結果として商品が活発に流通することもない。

そこで、昔の経済世界が必要としたのが、人々が自分の商品と他人の商品を偶発ではなく、自由かつ活発に交換できる仕組みであった。高度な商品の流通があつてこそ、はじめて経済社会は発展を遂げていく。そのためには、商品と商品を仲介する「なにか」が必要だったのだ。

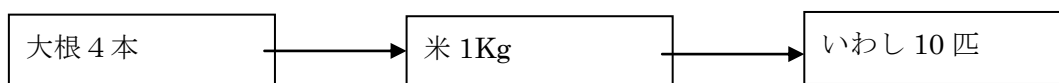
昔の日本で考えれば、米などはその「なにか」になりえるだろう（図6-2）。

図6-2



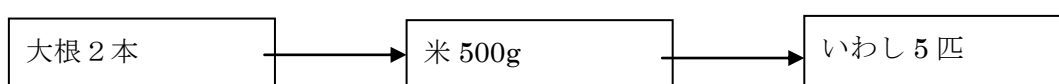
こうして、あるモノで商品の価値を表すことができれば、それを仲介して商品の交換が可能になる。図6-2の場合、米で商品の価値を表現しているので、大根を米に換えれば、その米をいつでもいわしと交換できるようになる。大根片手にいわしを釣った人との偶発的な出会いを求めて右往左往する必要はなくなるわけである。こうして、商品の流通は限られた部分的なものから、全社会的な一般的なものに変貌を遂げた。

図6-3



また、図6-3のケースでは、米は商品の交換の仲介としての役割を果たしていると同時に、その重さを調整することで、商品の価値も表現できている。このことは、欲しいいわしが五匹だったら、一キログラムの半分の五百グラムの米で交換できることから明らかである（図6-4）。すなわち、このケースにおける米は、「貨幣」と言うことができる。

図6-4

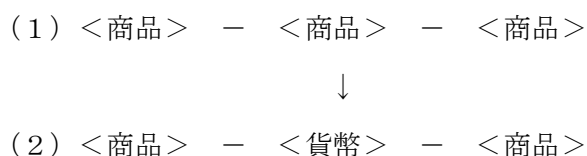




貨幣の誕生と発展の歴史は本書では割愛するが、当初は、米のような一般的な、かつ、十分な量が常に用意されているモノ（供給量が不足してしまったら、現代でいうところのデフレが発生してしまう）が流通を仲介し、その重さによって価値を表現してきたと考えられている。

しかし、さらなる経済社会の発展によって、「価値」だけは残され、しかし、「使用目的」は失った（有用物ではない）、すなわち商品とはまったく異なるモノとして貨幣が誕生した。

そして、この貨幣の誕生によって、次のように、（１）の流通形態は（２）の流通形態へと劇的に変化を遂げたのである。



最後に、もう一度だけ繰り返す。

「貨幣」は「商品」ではない。

なぜなら、貨幣には「価値」はあるが、「使用目的」がない（有用物ではない）からだ。

そして、この一見なんでもないような貨幣の特質こそが、65 ページで述べるように、前ページの（１）とも（２）とも異なる新たな流通形態を生むこととなり、しかも、この資本主義社会では、その新たな流通形態によって貧富の差が生じているのである。だから、義務教育では、当たり障りのない貨幣の役割は教えても、「貨幣は商品ではない」ことを教えないのかもしれない。

確かに、お尻も拭けない一万円札ではあるが、それでも、やはり一万円札はトイレットペーパーよりもありがたいことには変わりはない。なぜなら、一万円札には一万円の「価値」があるからだ。そして、私たちはそのことを無意識に自覚し信用しているが、先に述べたように、結局のところ、貨幣を支えているのはこの「信用」なのである。「信用」を失った一万円札など、単なる落書きに過ぎない。

-----

「いやー。前回の講義がなかなか手ごわかったこともあってか、今回の講義はわかりかし簡単でしたね」

僕は思わず爛漫な笑顔になった。

「まあ、『貨幣論』を研究している学者がこの講義を見たら、さぞや怒るだろうな、というくらいざっくり、貨幣の歴史やその他もろもろを省きましたから。それに、貨幣は身近なものですから、それも理解しやすい理由の一つでしょう」

「要は、貨幣には『価値』はあるけど、『使用目的』がないから、『貨幣は商品ではない』ってことを押さえておけばいいわけね」

「そのとおりです、エリナさん。それから、せっかくですから、一つ、貨幣にまつわるトリビアを教えますね。今は、硬貨や紙幣の種類と枚数で価値の大小を表現していますが、昔は、銀や金の重さで価値を表現していました。ほら、イギリスの通貨は『ポンド』でしょう。これは、重さで価値を表現していた時代の名残りなんです」

マルクンは、今日最初に教室で見たときの混乱はおさまり、落ち着き払って雑学を披露した、と思ったその瞬間であった。突如、興奮気味に口を開いた。

「さて！ ついに貨幣が登場したことで、いよいよ話は核心に近付いてきました。そろそろ、サラリーマンが潤うことのできない驚愕のメカニズムを覆っている皮を、一枚、また一枚と剥がすときがきたのです。でも……」

「でも？」

「それは次のお話」

#### 【エピソード6のまとめ】

●商品の交換（流通）は、互いの「労働時間」、すなわち「価値」が等しいときに成立するが、「交換欲求」が偶発的にしか合致しないようでは、交換は成立しづらい。そこで商品の流通の仲介として誕生したのが貨幣である。

●貨幣は、商品の「価値」を表現できる。すなわち、貨幣は「価値」を持っている。しかし、貨幣には「使用目的」がない（有用物ではない）。したがって、貨幣は商品ではない。

●貨幣の誕生によって、商品の流通は次のように変化した。

<商品> - <商品> - <商品>

↓

<商品> - <貨幣> - <商品>

## エピソード7 サラリーマンは現代の奴隷か？

今日は、マルクンの七回目の講義である。毎回、ふざけているのか素なのかよくわからない変人ぶりを発揮しているマルクンだが、今回も突然こんな一言で講義がはじまった。

「罪もない人々を生涯働かせ続ける奴隷制度。これほど醜く、また唾棄すべきモノはありません。人類最大の恥、と言ってもいいでしょう」

僕とエリナは、完全に「？」である。マルクンの発言には激しく同意するが、これまでの講義とのつながりとか、脈絡といったものがまるでない。

「かくも嫌な響きを持つ奴隷ですが、二人はこの奴隷をどのように定義しますか？」

うーん。マルクンの言わんとしていることがまるで理解できないが、今回の講義と無縁の質問とも思えない。であるならば、当然、質問には答えなければならないだろう。とりあえず、今思い付いたことを僕が口にする。

「職業を選択する自由がない人。これが奴隷じゃないんですか？」

「はい。確かに当たっています。当然ですが、奴隷には職業選択の自由などありません。主人の意のままに働かされます。でも……」

「でも？」

「そういう多喜二くんはどうですか？」

「僕ですか？ 僕には職業選択の自由がありますよ」

「なるほど。では、多喜二くんは現在、その『権利』を行使していますか？」

僕は、返す言葉がなかった。確かに、自分で選んだ会社である。自分で選んだ仕事である。でも、本当になりたかった職業は別にある。ただ、そうした会社の面接にすべて落ちたために、僕は今の会社で働いている。

マルクンが僕の瞳を直視しながら口を開く。

「職業選択の自由。美しい言葉です。素晴らしい理念です。でも、その権利を行使できている人がはたしてどれくらいいるのでしょうか？ 雇用主が『イエス』と言わなければ、そこで働きたくても働けないのが現実です。雇用側だけの事情で『選択の自由』は狭められ、時にはその自由を奪われ、結果、望んでもいない仕事をしている人は少なくないのではないでしょうか？ それに、辞令一つで、他部署への異動や、時には遠方にも転勤しなければならないのがサラリーマンですよ」

マルクンの言うことはもっともだ。だけど、もっともだからこそ、それが僕の癪に障った。

「じゃあ、なんですか。マルクンは、僕たちサラリーマンは奴隷と同じだと言いたいんですか？」

「まあ、そう結論を急がないでください。ただ、奴隷ほどではないにせよ、望んでいない仕事を強制的に強いられたり、また、そんな嫌な仕事でも精を出さなければ生活できないという点では、サラリーマンと奴隷には類似点があることを理解してほしいです」

「類似点？ 結局はマルクンは、僕を奴隷だと言ってるわけじゃないですか！」

「だから落ち着いてください。私は『類似』と言ったんです。『同じ』とは言ってません。そんなことで興奮しているようでは、この先、私の講義を聞いたら、脳みそが爆発して憤死しちゃいますよ。じゃあ、エリナさんはどうですか？ 奴隷をどのように定義しますか？」

「そうね……。無償で働かされる人。それが奴隷かしら？」

「さすが、多喜二くんよりはまともな回答ですね」

喧嘩、売ってんのか？ マルクン。今の俺は熱いぜ！ 触ると火傷するぜ！

「でも、奴隷だって、働き続けるための衣食住は確保されていますよね。これを『賃金』、すなわち『労働の対価』と考えることもできます。ということは、エリナさんの主張がもし奴隷の定義であるならば、もらった賃金が生活費に消えてしまうサラリーマンも奴隷ということですよ」

エリナが珍しく反論しない。口を閉ざしている。そして、僕はエリナが今なにを思っているかを理解していた。六本木ヒルズで見たあの夜景だ。エリナは、あの夜景の正体をこう言っていた。

「一部屋一部屋から漏れているのは、庶民が日々流している汗や涙を成分にした光よ」

そう。僕たちサラリーマンだって、あって当然の家すら買えない。「夢のマイホーム」だ。みんな借家ではないか。僕なんか、給料の三分の一はアパートの家賃に消えてしまう。これは、戻ってくることもない金だ。土地と家を持たない限り、一生、払い続けなければならない無駄金だ。それに、地方の人が「私は持ち家だ」と言っても、ローンを払ってる限りは結局は借家だ。

住む場所も自由に決められるわけではない。家賃と通勤時間という制約の中で、かろうじて希望に合致、いや、希望に近い物件を借りて住んでいる。昔、欧米人は「日本人の家はウサギ小屋」と、その狭さを揶揄（やゆ）していたそうだが、僕のアパートなんてウサギ小屋どころか「ウナギの寝床」だ。ワンルームに住む僕は、部屋にいるときはそのほとんどの時間をベッドの上で過ごしている。この僕の住居形態が、主人から提供された場所

に住んでいる奴隷よりも各段に素晴らしいと、僕は自信を持って主張できるだろうか……。

それに、よくよく考えると、そもそも、なぜ土地はみんなのものではないのだろう？ 日本の人口が一億三千万人なら、土地を一億三千万等分して、みんなに分け与えれば、僕の給料の三分の一が毎月煙のように消えてしまうこともなくなる。そして、僕から見たらなくなったその金は、毎月、大家の懐に流れ込んでいるのだ。なぜ、国土、いや、地面が、そこに生存する人々に平等に与えられないんだ……。

うーむ。確かにわからなくなってきた。僕たちと奴隷の違いは一体なんだろう……。

サラリーマンは現代の奴隷か？

「二人とも頭フル回転で、しかもどんどん暗い方向にはまっていったようですね。ちょっと、私の質問は刺激が強過ぎましたか？」

「ちょっとね」とエリナ。

「ただ、私が『奴隷』という言葉を持ち出した。これはすなわち、私の講義が佳境に入ったことを意味します。いずれにせよ、この状況では先に進めないで、奴隷の定義は後回しにして、『資本の増殖のメカニズム』について学んでいきましょう。喜んでください。ついに二人は、『資本主義』の核心にこれから迫るんですよ」

資本主義の核心……。講義は、もうそんなところまで進んでいるのか。だから、マルクンはとても嬉しそうなんだ。ふと思っていたら、そのマルクンが太陽に向かって咲き誇るひまわりのような明るい声で僕たちに問いかけてきた。

「では、質問ばかりで恐縮ですが、『利潤』を上げるもっとも手っ取り早い方法が二人にはわかりますか？」

僕たちは無言だ。頭の片隅でまだ奴隷の定義を引きずっていることもあるが、マルクンの質問の答えがわからない。すると、僕たちのそんな暗い表情を見て、マルクンが一オクターブ高い声を出した。

「多喜二くん。ちょっと、気分転換に好きな数字を三つ、挙げてください。その数字でこの先の講義を進めましょう」

おっと。こんな質問なら大歓迎だ。少しばかり気持ちに日が差してきたぞ。「好きな数字を三つ」と言われたらあれしかないじゃないか。

「82、62、40！」

だが、マルクンは怪訝な顔をしている。好きな数字を三つと言ったのはマルクンでしょ

う？ そのとき、横からエリナの呟きが聞こえた。

「82、62、40？ ……？」

そして、呟きが金切り声に変化した。

「それ、アタシの3サイズじゃない！ しかも、40 ってなによ、40 って。どんな不格好な体形よ。アタシや、トイレのマークか！」

その後、エリナの平手が僕の頬を打つ音が、一分ほど部屋中に響き渡ったのはいうまでもない。

そして、そのビート音が終わると、マルクンが口を開いた。もっとも、僕の意識は消しゴムでこすられたかのようにかすんでいたが。

「うーん。多喜二くんの数字はちょっと半端なので、ここでは、あらかじめ決めておいた、一万円、一キログラム、百本、の三つの数字を使いましょう」

おい……、マルクン。最初から決めてるなら聞くなよ……。それに、三つの数字、全部、単位が違うって、なんだそりゃ？ この、アンパンマンのように赤く腫れあがった俺のほっぺをどうしてくれる……。

-----

では、今回のゲストとして二人の日本人にご登場願おう。

一人は、稲作一家に育った太郎。彼が作った米の価値を、ここでは一キログラムで一万円とする。

もう一人は、バラを栽培している彼の幼馴染みの花子。ここでは、彼女が栽培したバラを百本で一万円とする。

さて、ある日、太郎は花子に、一キログラムの米と百二十本のバラの交換を申し出た。そばにいたら、花子に「やめておきなさい」と言うところだが、言葉巧みな太郎の口車に乗せられて、人のいい花子はなんと、その要求に応じてしまった。しかし、この交換が不公平なのはいうまでもない。

花子のバラの価値は一本あたり百円である。

$$10,000 \text{ 円} \div 100 \text{ 本} = 100 \text{ 円}$$

すなわち、百二十本ならその価値は一万二千元である。

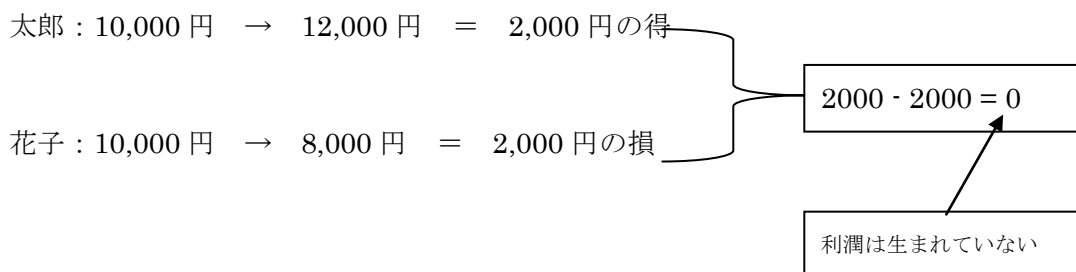
$$100 \text{ 円} \times 120 \text{ 本} = 12,000 \text{ 円}$$

つまり、太郎の申し出は一万円と一万二千元の交換であり、これで太郎は難なく二千元の利潤を手に入れたことになる。

このように、利潤を上げるもっとも手っ取り早い方法は、異なる価値の商品を交換することである。こうした交換は「不等価交換」と呼ぶが、こんな甘い話は実際には成立しない。このことは、私たちが一万円を持ってデパートに行っても、一万二千元の商品は買えないことから明らかである。

もっと厳密に言えば、太郎と花子のケースでは、太郎は利潤を上げているが、その分、花子は損をしている。すなわち、視野を広げると、太郎と花子の交換からは利潤は生まれていない（図7-1）。

図-7-1



すなわち、不等価交換はそもそも成立しないばかりか、不等価交換では全社会的に見たときに、「得」と「損」が互いに相殺されるので、それで利潤が発生することはない。

そこで、利潤を上げる方法として、この不等価交換は候補から排除し、等価交換を例に話を進めていくが、ちなみに、太郎が米一キログラムを売って一万円という貨幣を得て、その一万円で花子からバラを百本買ったとする。すると、このときの流通は次のように表される。



図 7-2

<商品> — <貨幣> — <商品>  
米            10,000 円            バラ

しかし、これでは、「食べる」という使用目的を持った「米」が、「飾る」という使用目的を持った「バラ」に姿を変えているだけで、価値はまったく増殖していない。

ほんの一例を示したに過ぎないが、ここで言わんとしているのはこういうことだ。

資本主義経済は、図 7-2 のように商品からはじまる流通とは違う世界である。しかも、図 7-2 では新たな価値は生まれていない。

では、これを前提に、「資本主義経済ではどのような流通となっているのか」に着目すれば、おのずと次の結論に帰着する。

資本主義経済では、まず資本ありきである。

「資本」とは、「利潤の追求を目的として事業を営むときに最初に必要となる貨幣」である。どんな会社でも、最初に資本金を用意するところからはじまる。ちなみに、この「資本金を用意した人」が「資本家」、そして、そこで働く人が「労働者」であることは説明の必要はないだろう。

会社は、この「資本という名の貨幣」をまず用意して、それを元手に事業を営むわけだから、資本主義経済における流通の姿は、次のように貨幣からはじまることになる。

図 7-3

<貨幣> — <商品> — <貨幣>

仮に、今の段階でこの図 7-3 を見てピンとこなければ、とりあえず、次のような理解でも構わない。

資本（貨幣）を用意して、それを元手になんらかの経済活動を行えば、売上金として貨

幣が手元に戻ってくる。これが「事業を営む」ということであり、それを簡素化すると図 7-3 のようになる。

それよりも、この単純な図 7-3 は、とてつもなく大切なことを私たちに教えてくれている。それは、次の点だ。

商品が貨幣と貨幣の仲介をしている。

エピソード6の繰り返しになるが、貨幣は商品を仲介する目的を持って誕生したものだ。ところが、図 7-3 のように、流通の中に貨幣が登場すると、必然的にある現象が発生する。それは、「商品が貨幣と貨幣の仲介をする」という現象である。

エピソード6で解説したとおり、貨幣は商品ではない。「価値」は持っているが「使用目的」がない（有用物ではない）からだ。

そして、その貨幣で流通がスタートして、最後に再び貨幣に姿に戻すときに、その仲介役が務まるのは商品だけなのである。

#### 図 7-4

<貨幣> — <貨幣> — <貨幣>

図 7-4 のような、こんな流通は存在しないのだ。時に、図 7-4 を見て「金の両替」を思い浮かべる人がいるが、一万円札を千円札、十枚にくずしたところで、そうした行為が経済活動における「流通」とか「交換」とは程遠いことは説明の必要を待たないであろう。

また、図 7-4 を見て、銀行にお金を預ければ利子が付く、といった流通を考える人もいるかもしれないが、その場合も、預けたお金が膨らんで手元に戻ってくるまでの間にはさまざまな「商品」が介在しており、ただそれが私たちの目には見えていないだけの話である。

いずれにせよ、資産運用の類の話は、損をした人のお金がそのまま得をした人に流れるゼロサムゲームの側面もあり、本書の主旨から大きく逸脱するので、説明は差し控えたい。

大切なことは、図 7-4 のような流通は存在しないことをきちんと認識することである。

また、貨幣が誕生して以降、もはや、次のような流通、すなわち物々交換もこの世界からは消えてなくなった。

#### 図 7-5

<商品> — <商品> — <商品>

図 7-3 の単純な姿。そして、その単純さの中に隠された次の二つの現象。

- ・商品が貨幣と貨幣の仲介をしている。
- ・物々交換という仕組みの崩壊

これが資本主義経済における流通を端的に表している。

さて、では基礎を押さえたところで、一步進んで、今度は資本が利潤を生むための流通を図にしてみよう。

#### 図 7-6

<貨幣> — <商品の消費> — <増加した貨幣>

繰り返しになるが、貨幣は商品と商品の仲介をする。その逆も真なりで、商品は貨幣と貨幣の仲介をする。

しかし、この場合、商品になんらかの運動が加わらなければ貨幣は増加しない。「なんらかの運動」というと小難しいが、商品は消費するために存在している以上、図 7-6 のように、<貨幣>と<増加した貨幣>を仲介できるのは<商品の消費>しかありえない。

また、このとき、商品の価値が増加しなければ、その次にくる貨幣も当然増加しない。

ただし、この図 7-6 こそが大問題なのである。ちょっと考えてみていただきたい。そもそも、「商品」の「価値」を決めているのは「労働時間」である。そして、労働の結果作られた商品の「価値」が、流通の過程で増加するなんてことがあるのだろうか？ どうやら、ここはとくと検証する必要があるそうである。

そこで、お馴染みのマイケルとマドンナを呼んできたので、ちょっと彼らのやり取りを  
ご覧いただきたい。

先日、マイケルが三日かけて焼いたパンを、一日で編み上げた帽子と交換してもらおう  
と思ったマドンナは、捨てゼリフを残してマイケルのものを去った。しかし、そこは向学  
心旺盛なマドンナのこと。マイケルがなぜ、パンと帽子を交換してくれなかったのか、十  
分に納得したようである。

マイケルのパンの価値：「三日分の労働時間」 > マドンナの帽子の価値：「一日分の労  
働時間」

この不等号 (>) が等号 (=) でなければ交換は成立しない。マドンナはこのことに気  
付いたのである。

しかし、どうにも、マイケルが三日かけて焼いたあのパンが欲しい。そんなことを考え  
ながら、ある日、クローゼットを整理していたら、昨年、自分で愛用していた白い帽子が  
出てきた。

「これだわ！」

マドンナは思わず叫んだ。

そして、マイケルにパンを持参で公園にきてほしいと頼み、その白い帽子を手に公園に  
向かった。

「マドンナ！ お望みのモノ持ってきたよ。ほら、三日かけて焼いた自慢のパンだ」

「マイケル！ ありがとう。本当に美味しそうね」

「で、今日呼び出したのはなんの用だい？ ひょっとして、このパンとなにかを交換した  
いのかい？」

「ええ、ビンゴよ。見て、この白い帽子！」

マイケルは、穴が開くほどその帽子を見つめると言った。

「うーん。素敵な帽子じゃないか。当然、その帽子を編むのに三日かかったんだよね」

「もちろんよ。昨年、三日かけて編んだ自信作よ。どう、マイケル。これなら、そのパン  
と交換してくれるわよね？」

マイケルは、一瞬、険しい表情を見せて言った。

「昨年、編んだの？　じゃあ、誰かがかぶってたの？」

「ええ、私が昨年の冬にかぶっていたわ。でも、見て。きちんと洗濯もして、真っ白でしょう」

「……。マドンナ、確かにきみは魅力的な女性だ。思わず、その瞳と透き通るような白い肌に吸い込まれそうになる。だけど、それとこれとは話は別さ。その取引には応じられないよ」

……。どこかで聞いたようなセリフである。

「まあ！　女の私に恥をかかせて！　許せない。もう結構よ。さようなら。あなたの今後の活躍を願っているわ！」

色白の顔を真っ赤に上気させてベンチから足早に立ち去るマドンナの後姿を見送りながら、マイケルは肩をすぼめて呟いた。

「オー、マイ、ガッ！」

さて、これでもうお気付きだろう。

先に登場したマイケルとマドンナの交換。マイケルが一日で焼いたパンと、マドンナが一日で編んだ帽子の交換が成立したのは、ともに未使用であったからだ。

もし、マドンナの帽子が、誰かが一年間、使用した後のものであったら交換は成立しない。消費された分、帽子の価値が下がっているからだ。

そう。今、私たちは商品の価値について、とても重要な特性を学んだところである。

商品の価値は、消費すれば目減りする（失われる）

帽子はまだいい。一年経っても、まだそれなりの価値が残っているだろう。しかし、パンなんて食べたらそれでおしまいだ。その瞬間に無価値になってしまう。

-----

そう締めくくると、なぜかマルクンは遠い目になった。

「どうしたの？　マルクン？」とエリナが聞く。

「あ、ちょっと思い出してしまって……」

「なにを？」と今度は僕が問う。

「……。わかりました。二人のために、私のあの辛い思い出を話しましょう。そうだ。ちなみに二人はビートルズは好きですか？」

実は、僕たちは揃って大のビートルマニアだ。

「なら、ビートルズの初期のナンバーに『アンナ』というカバー曲があるのは知ってますね」

「もちろん！『あいつが好きなら一緒にどこかに消えちまえ。その代わり、あげた指輪は返してネ』ってなんともせこい歌を、不良少年の面影が残るジョン・レノンが歌っているところがかわいらしいよね」

エリナはとても嬉しそうだ。

「同感です。そして、その『アンナ』の歌詞ではありませんが、私はこの図 7-6 を見るたびに嫌な思い出が頭をよぎるんです」

#### 図 7-6

<貨幣> — <商品の消費> — <増加した貨幣>

「どんな？」

「額にして六十万円。一昨年、プロポーズするつもりで大枚はたいて指輪を買ったんですが、見事に破局してしまいました」

「へえー、マルクんにそんな女性（ひと）いたんだ。長い付き合いだけど、アタシ、気付かなかった」

「ええ、いたんです。で、しかたがないので、買取販売店にその指輪を持ち込んだんですが、なんと、買値は五万円だって言うんです」

マルクンは、もはや涙目だ。

「現実は厳しいですね。消費どころか、一度も薬指にはめさせてもらえなかった指輪の価値が十分の一以下になってしまうのですから、この無念さを図にぶつけると、貨幣からはじまる流通はこのようにならなければおかしいですよ」

言って、マルクンは図を書いた。

#### 図 7-7

<貨幣> — <商品の消費> — <減少した貨幣>

それを見て、僕の体は軽く粟立った。当然、エリナも気付いているだろう。これは大きな問題だ。完全に矛盾に陥ってしまった。

僕は、思わず席を立て、黒板に書かれたマルクンの図に、新たな図式を書き加えた。

(A) <貨幣> — <商品の消費> — <減少した貨幣>

↓

(B) <貨幣> — <商品の消費> — <増加した貨幣>

「この(A)を(B)にしなければ、資本は増加しない、ってことですね」

すると、エリナが僕のセリフを引き取った。

「もっと言えば、資本主義経済なんてものもこの世界に存在しえなくなってしまうわ。資本を準備して、事業を営めば営むほど貨幣が目減りしていくんじゃ、誰も事業を興す人なんかいないよね……」

この矛盾は解消できるのか？ しばし、沈黙が教室を包んだが、そのとき僕は閃(ひらめ)いた。

「(B)にできるよ、エリナ」

「え？」

「ほら、プレミアだよ」

「どういうこと？」

エリナが質問する側に回るなんて、なんと気分のいいことか。僕は空咳をすると、自信満々に口を開いた。

「たとえば、ビートルズがデビュー前になけなしのお金で買った楽器も、ビートルズが消費することでプレミアが付いて貨幣は増加するじゃない。そのプレミアのことを(B)は表してるんだ」

ところが、エリナとマルクンはあきれ顔だ。え？ 僕、なにかおかしいこと言った？

「多喜二くん。これはプレミアの話ではありません」

「え？」

「確かに、著名人が消費することで価値は増大します。でも、その方法でしか利潤が生め

ないようでは、経済そのものが成立しませんよ。流通の仲介者として必ず著名人が存在しなければならないからです」

「そうよ。それじゃあ、著名人が何億人いても足りないでしょう、多喜二。っていうか、著名人はあくまでも圧倒的少数だからこそ著名人なんだけど」

僕は、猿の尻のように顔を赤くしてうつむいた。確かに二人の言うとおりで。

プレミアというのは、著名人が消費するからこそプレミアであって、今、僕たちが直面している問題は、こうした例外ではなく、一般社会で身の周りで現在も発生している「商品の消費が価値を生む」という現象だ。そして、これが矛盾に満ちているから頭を抱えているんじゃないか。

要するに、貧乏講師のマルクンが消費すれば、指輪の価値が十分の一以下になってしまうのに、逆に、商品の消費によって価値を高めるなんてことが可能かどうか議論の焦点なのだ。

こんなとき、Mr.マリックならば、観客から借りた千円札を一万円札に変えるのは容易なことだ。しかし、それは彼がマジシャンだからだ。すなわち、千円札が一万円札に変わるのは手品であり、そこにはタネがある。

同様に、本来ならありえない(B)の流通を可能とするためには、Mr.マリックのハンドパワーも顔面蒼白の手品のタネが必要となるのだ。

そして、僕がその手品のタネ明かしをマルクンにお願いしようと思ったときであった。「すみません。話が途中ですが、今日のところはここまでにしましょう。二人も疲れたでしょう？ のっけから奴隷がどうのとはじまって、ここで完全に理論が行き詰まりましたから」

そりゃ、疲れはしたが、講義を打ち切るのは、マルクン、あなたが辛いことを思い出して、気力が萎えたからでしょう？

「ちょっと、マルクン。『理論が行き詰まった』って、もちろん、この矛盾は解消できるのよね？」

エリナが、幾分興奮気味に尋ねた。

「はい。この矛盾が解消できたとき、二人は資本主義の本質を学んだことになります」

「じゃあ、いいわ。今日はここまでで。マルクンもかなり気落ちしてるみたいだし」

「気落ち？ このマルクンが？ ハハハ。そんなことはありません。それに、なんの未練もありませんよ」



そして、ため息をつく、マルクンは天を仰いでささやくように呟いた。

「おお、アダム。きみの薬指はまだ空いているかい？ ああ、スミス」

おい、マルクン。未練たらたらじゃないか。それに、アダムとかスミスとか、何人だ、その女は？ いや、そもそも本当に女か、その人？

#### 【エピソード7のまとめ】

●「不等価交換」はそもそも成立しない上に、全社会的に見たときには、「得」と「損」が互いに相殺されるので、それで利潤が発生することはない。

●資本主義経済は、次のような商品からはじまる流通とは違う世界である。しかも、次の流通では新たな価値は生まれていない。

<商品> — <貨幣> — <商品>  
米 一万円 バラ

●資本とは、「利潤の追求を目的として事業を営むときに最初に必要となる貨幣」である。

●資本主義経済における流通の姿は、まず資本ありきである以上、次のように貨幣からはじまる。

<貨幣> — <商品> — <貨幣>

●商品は貨幣と貨幣の仲介をする。

●商品の価値は、消費すれば目減りする（失われる）。

●資本主義経済とは、本来は（A）の図式を（B）の図式に変えた世界である。

（A） <貨幣> — <商品の消費> — <減少した貨幣>

↓

（B） <貨幣> — <商品の消費> — <増加した貨幣>

さて、「エピソード7 サラリーマンは現代の奴隷か？」までをお読みいただきましたが、本当にサラリーマンは現代の奴隷なのでしょうか？

そして、

<貨幣> — <商品の消費> — <増加した貨幣>

すなわち、貨幣で商品を買って、それを消費したら、より大きな貨幣になって手元に戻ってくる。本当にそんな魔法のようなことが可能なのでしょうか？

この続きは・・・

(エピソード8	サラリーマンは資本家から見たら商品なのか？
エピソード9	なぜ、資本家は金持ちなのか？
エピソード10	本当にサラリーマンは不幸なのか？ I
エピソード11	本当にサラリーマンは不幸なのか？ II
エピローグ	六本木ヒルズ、大展望台にて II

本篇でお楽しみください。

『サラリーマンだから貧乏ですが、なにか?』（著者：大村あつし、PHP 研究所）

→ <http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/4569776620/fushicho-22/>

本作品は、現在 PHP 研究所から出版されている既刊書であり、著作権は大村あつしに帰属します。

よって、下記の一切の行為を禁じさせていただきます。

回覧、配布、改変、二次利用

## 参考

『資本論1～9』（カール・マルクス著、フリードリヒ・エンゲルス編纂、向坂逸郎翻訳、岩波書店、1969年1月～1970年3月発行）

『経済学批判』（カール・マルクス著、武田隆夫翻訳、岩波書店、1956年1月発行）

『賃労働と資本』（カール・マルクス著、長谷部文雄翻訳、岩波書店、1927年10月発行）

『経済学・哲学草稿』（カール・マルクス著、城塚登翻訳、田中吉六翻訳、岩波書店、1964年1月発行）

『賃銀・価格および利潤』（カール・マルクス著、長谷部文雄翻訳、岩波書店、1981年1月発行）

『マルクス・エンゲルス 共産党宣言』（カール・マルクス著、フリードリヒ・エンゲルス著、大内兵衛翻訳、向坂逸郎翻訳、岩波書店、改訂版、1971年1月発行）

『国富論1～4』（アダム・スミス著、水田洋翻訳、杉山忠平翻訳、岩波書店、2000年5月～2001年10月発行）

『雇用、利子および貨幣の一般理論〈上〉〈下〉』（ケインズ著、間宮陽介翻訳、岩波書店、2008年1月、2008年3月発行）

『クルーグマン ミクロ経済学』（ポール・クルーグマン著、ロビン・ウェルス著、大山道広翻訳、石橋孝次翻訳、塩澤修平翻訳、白井義昌翻訳、大東一郎翻訳、東洋経済新報社、2007年9月発行）

『マンキュー入門経済学』（グレゴリー・マンキュー著、足立英之翻訳、柳川隆翻訳、石川城太翻訳、小川英治翻訳、地主敏樹翻訳、中馬宏之翻訳、東洋経済新報社、2008年3月発行）

『限界効用理論の歴史（1979年）』（エミール・カウダー著、斧田好雄翻訳、嵯峨野書院、1979年11月発行）

『ネクスト・ソサエティ～歴史が見たことのない未来がはじまる～』（P・F・ドラッカー著、上田惇生翻訳、ダイヤモンド社、2002年5月発行）

『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？～身近な疑問からはじめる会計学～』（山田真哉著、光文社、2005年2月発行）

『お金は銀行に預けるな～金融リテラシーの基本と実践～』（勝間和代著、光文社、2007

年11月発行)

『資本論の教室～きちんとわかる経済学の基礎～』(川上則道著、新日本出版社、1997

年8月発行)

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

社団法人日本自動車販売協会連合会 (<http://www.jada.or.jp/>)